



令和4年7月29日

三重大学
三翠同窓会発行☎ 059-231-9677
振替 00850-6-8198

ご挨拶



三翠同窓会会長

久松 眞

これまで中止されてきたイベント等は感染予防策を取りながら開催できるようになってきましたので、長かったトンネルもあと少しで抜けられると期待します。会員の皆様におかれましてはストレス対策を含む健康管理に苦心されたと存じますが、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。また、平素より同窓会活動に格別のご理解とご協力を賜り心からお礼申し上げます。

大正十一年(一九二二年)に三重大学の前身である三重高等農林学校が開校されましたので、今年でちょうど百年を迎えます。三翠同窓会名簿から、第一回目の卒業生は大正十四年三月で農学科、農業土木学科、林学科からそれぞれ約三十名が社会に出られたことが分ります。その後、中部・北陸から近畿圏にかけて一次産業の近代化を指導し地域に貢献された人材が三重大学より多数輩出されたことは容易に想像できません。我々にとっては貴重な歴史ですので未来に活かしていかなければなりません。先輩諸氏のこのような活躍の高い評価により地域圏大学として農学系教育研究学部とし

て今も高く期待されていることは、入学定員の多さや多様な教育研究分野から容易に判断できます。そのような理由から、新入生のオリエンテーションでは素晴らしい教育環境を提供できる大学に入学されたことを伝え勇気づけました。同時に、長いようで短い大学生活を有意義に過ごし、素晴らしい先輩がたくさんおられる三翠同窓会へ入会していただくこともお願いしました。

ところで、三重大学として百年を祝う行事の企画が活発になってきたこともお伝えしなければなりません。各学部の同窓会の会長が集まって全学同窓会の連携を深めつつ、大学として創立百年記念事業の計画をこれから具体化していきます。ホームカミングなどの開催も予想されます。

最後に、母校三重大学と生物資源学部の益々の発展と充実を望むとともに、皆様方のご健勝とご活躍を祈願いたします。ビッグイベントを成功させ本同窓会のなお一層の発展もお祈り申し上げます、ご挨拶とさせていただきます。

ご挨拶

生物資源学研究科長
学部長

松村 直人

三翠同窓会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお喜び申し上げます。

平素より、生物資源学部・生物資源学研究科のことを気にかけていただき、ご理解とご支援を賜りまして、心より御礼申し上げます。新型コロナウイルス感染症の影響は依然として残ってはおりますが、4月からは講義も原則対面となり、教職員一同、平常の大学生活に一日も早く戻るべく、対応しているところです。

さて、この4月より、奥村前研究科長の後を受け、研究科長・学部長を拝命致しました。神原評議員・副研究科長(教育担当)、橋本副研究科長(研究担当)、渡辺附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター長、吉岡附属鯨類研究センター長、研究科長補佐として、岡島教授(学部教育)、名田教授(学生)、立花教授(研究企画)、木佐貫教授(研究広報)、全学的立場のご意見が伺える方として、梅川参与・特命副学長、酒井副理事、苅田副学長を加えた執行部体制で研究科の運営にあっております。

研究科の事務部門も、研屋事務長を始め、一丸となって、研究科・学部の管理運営に取り組んでいただいております。

現在、三重大学を始め、国立大学法人は1期6年の中期計画・中期目標を掲げて運営されており、昨年度で法人化後の第3期が終了し、今年度から第4期に入っております。様々な指標に基づき、途中で中間的

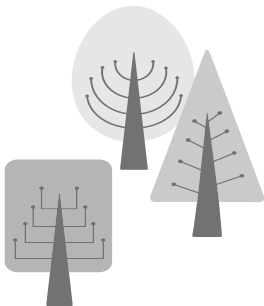
暫定評価を受け、最終評価の後に、評価結果を次期の運営費交付金の一定枠の配分に反映させるといふ厳しい状況になっております。

本学部は三重県にある地方大学という側面と、昨年12月に前身の三重高等農林学校から100周年を迎えた全国でも伝統ある農学系学部でもあります。近隣の大学にはない、農林水産・環境・食品という特徴を持つ「総合農学」の学部であり、今後も地域の中核大学として、発展させていきたいと思っております。

昨年度は、長年の懸案でありました、水産実験所の移転を実現させ、中村鳥羽市長、伊藤学長らをお招きし、開所式を挙行致しました。鳥羽市水産実験所と連携し、「鳥羽海洋教育研究センター」を核として、近隣の国・県の研究所、鳥羽水族館、鳥羽商船高専、ミキモト、名古屋大学臨海実験所なども広域連携し、水産・海洋学の一大拠点、「海のシリコンバレー」を目指す「伊勢志摩海洋アライアンス」の構築を目指しています。

今回の移転に際しましては、水産系の同窓会「勢水会」から三重大学振興基金を通して多額のご寄附をいただき、諸先輩方のご厚意に感謝致します。現在も100周年を記念致しまして、学部・研究科の教育研究、附属施設の農場、演習林、水産実験所、練習船「勢水丸」、鯨類センターの充実を意図した振興基金へのご寄附を募っておりますので、引き続きのご支援をお願い致します。

最後に、三翠同窓会の会員の皆様には、同窓会活動をさらに活発化させていただき、共に生物資源学部・研究科の発展を支えていただくことをお願いし、併せて、皆様のご健勝とご発展を祈念しまして、ご挨拶とさせていただきます。



会 告

三重大学三翠同窓会会員各位

三重大学三翠同窓会会長 久 松 眞

三重大学三翠同窓会総会を下記のとおり開催しますのでご出席をお願いします。

記

- 日 時 令和 4 年 9 月 10 日 (土) 午後 12 時 30 分から
(三翠同窓会三重県支部会総会終了後)
- 会 場 三重大学生物資源学部 大講義室 (2 階)
- 議 題 1. 平成 30・令和元～3 年度事業報告及び会計報告について
2. 役員改選について
3. 令和 4・5 年度事業計画及び予算案について
4. その他

総会終了後、三重高等農林学校創立 100 周年記念講演会等を引き続き開催しますので、ご参加をお願いします。

令和 4 年 7 月 29 日

100周年記念イベントのお知らせ

研究科長 松 村 直 人

三重大学生物資源部・生物資源学研究科は、1921年(大正10年)に三重高等農林学校として設置されて以来、2021年(令和3年)12月10日をもって100周年を迎えました。関係者の皆様への感謝の気持ちと共に、本学部・研究科の理念と姿を広く社会に発信するため、1年間に学部・研究科内で行っている様々な行事等を「生物資源100周年記念行事」として位置づけて企画・開催し、卒業生や同窓会をはじめとした学部・研究科に関係する多くの皆様との絆の強化などを2023年(令和5年)3月まで進める予定です。

記念行事の第1弾として2021年12月24日(金)、生物資源学研究科オープンラボを学部校舎からライブ配信にて開催しました。この企画は、教員と大学院生(学部学生)が研究室で行っている研究の成果を、農林水産・食品・バイオ・環境関連の企業や公的機関の方々へアピールし、教育・研究という側面から見た生物資源学研究科に対する理解を深めてもらうことを目的としています。今回のオープンラボでは「生物資源学研究科が取り組む地域拠点サテライト活動と将来」と題し、地域貢献を目指して取り組んでいる北勢、伊賀、伊勢志摩、東紀州、4つの拠点での研究活動を紹介し、続いて学生による活動紹介を行いました。オンライン上で139名(官公庁・企業67名、生物資源学部関係者52名、他学部関係者10名、学生10名)の方にご参加いただき、また同窓会員の皆様にも参加、発言いただきまして、ありがとうございました。

2022年3月29日(火)には北勢サテライトと生物資源学研究科の主催で、都ホテル四日市にて、『みえの未来図共創DAY in 北勢』が開催され、後半部分を100周年記念事業の第2弾として、『環境農林水産フォーラム in 北勢』を開催しました。研究科長から生物資源の歴史を踏まえながら研究科・学部の紹介、大学を取り巻く動向、みえの未来図を描くべく今後の地域共創の展望について、講演しました。続いて、基調講演では太陽化学(株)大久保勉氏にご登壇いただきました。「産学官連携がもたらしたもの」と題し、伊勢茶(かぶせ茶)に含まれるアミノ酸、テアニンの生産技術や機能性研究を例に、ご講演いただきました。また、本研究科教員より、北勢地域で活動している研究会や共同研究例の紹介、さらに、隣接する展示ブースにてポスター発表を行いました。北勢地域の企業、自治体、団体等職員ほか多くの方にご参加いただき、北勢地域の未来の共創に大いに期待ができる1日となりました。

このような一連の行事の中で9月10日に予定されている100周年記念式典についても告知させていただきます。隔年で9月に開催されている三翠同窓会総会開催時に、多くの同窓生が集まる機会を利用して、企画・開催するものです。まだ、詳細は未定ですが、会員の皆様方には是非、ご予約の確保をお願い致します。

専攻等近況報告

資源循環学専攻

専攻長 松田陽介

同窓会会員の皆さまにおかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。日頃より資源循環学専攻ならびに資源循環学科の教育研究活動へのご理解とご協力を賜り、心より厚く御礼申し上げます。本専攻・学科の近況についてご報告申し上げます。

現講座体制(農業生物学・森林資源環境学・国際・地域資源学講座)は平成27年(2015年)に始まりましたが、世の中の趨勢に合わせるよう次の体制を模索している最中です。次回の会報ではその内容をご報告できるのではないかと思います。教育研究の枠組みは時間とともに変わらざるを得ないところもありますが、COVID-19による行動制限下の中においても専攻教員は、学生との対話、実体験を養う視点を踏まえて工夫を凝らした内容で講義、実験などを進めております。オンラインでの対話や映像による疑似体験、講義資料などのWebを介した発信とメディアを多用するようにになりました。オンラインによる対応であったため学内は年中大変静かなものでしたが、今年度からは対面を基本に講義を進めておりにぎやかなキャンパスライフの日々に戻り始めました。

学部学生は、昨年度より教育的インターンシップを受けることが卒業要件化となりました。これは全学的な取り組みであり、

本学科では座学的な修学を地域社会での実践とつなげる好機ととらえています。学生がわずかな時間ですが実社会に身を置き、社会人の皆さまから直接ご指導いただく機会を得ることになります。無礼がないか一抹の不安もありますが、この活動を通して幅広い学びの重要性への理解が涵養されることを期待しています。会員の皆さまのお勤め先でも、学生の受け入れのご検討をいただければ幸いです。

専攻内の人事異動では、令和2年8月に附帯施設演習林の測上佑樹先生が准教授に、令和3年1月に園芸植物機能学の名田和義先生が教授に、同年3月に分子遺伝育种学の諏訪部圭太先生が教授に、4月に植物医科学の白水貴先生が准教授に、6月に昆虫生態学の塚田森先生が教授に、そして令和4年4月に緑環境計画学の松尾奈緒子先生が准教授にそれぞれ昇任されました。さらに、木質分子素材制御学の助教として徳永有希先生が4月に着任されました。徳永先生は、三重大学を卒業後に他大大学院で研鑽を積んで博士号を取得して戻ってこられました。今後のさらなる活躍を期待しています。また、循環経営社会学の野中章久先生が半年間(令和4年4月19月)の育児休業を取得しております。研究科内の運営面では、執行部として中島千晴先生、名田和義先生が研究科長補佐としてご活躍されておりました。令和4年度からは昨年度まで紀伊・黒潮地域フィールドサイエンスセンター長を務められていた松村直人先生が研究科長に就任され、名田和義先生が研究科長補佐(学生)、木佐貫博光先生が研究科長補佐(研究広報)に就かれており、日々、ご尽力をいただいております。

ります。

現在(2022.6.1)の専攻の教員構成を記します。

■農業生物学講座

○分子遺伝育种学

掛田克行教授、諏訪部圭太教授

(地域イノベーション学研究科)

○資源作物学

梅崎輝尚教授、長屋祐一准教授

○園芸植物機能学

名田和義教授

○動物生産学

松井宏樹教授、伴智美准教授

○草地・飼料生産学

近藤誠准教授

○植物医科学

中島千晴教授、白水貴准教授

○昆虫生態学

塚田森教授

■森林資源環境学講座

○森林保全生態学

木佐貫博光教授、鳥丸猛准教授

○森林微生物学

松田陽介教授、北上雄大助教

○土壌圏生物機能学

水野隆文准教授

○森林環境砂防学

堤大三教授

○森林利用学

石川知明教授、板谷明美准教授

○木質資源工学

中井毅尚教授、内迫貴幸助教

○木質分子素材制御学

野中寛教授、徳永有希助教

○緑環境計画学

松村直人教授、松尾奈緒子准教授

■国際・地域資源学講座

○生物資源経済学

中島亨准教授

○循環経営社会学

野中章久准教授

○資源経済システム学

常清秀教授

○国際資源植物学

関谷信人教授

○国際資源利用学

吉原佑准教授

○附帯教育研究施設

(紀伊・黒潮地域フィールドサイエンスセンター)

○附帯施設農場

(兼) 名田和義教授、奥田均教授、長菅輝義教授、三島隆准教授

○附帯施設演習林

(兼) 石川知明教授、沼本晋也准教授、測上佑樹准教授

○協力教員

○先端科学研究支援センター

小林一成教授、土屋亨准教授、加賀谷安章准教授

○連携大学院

○野菜ゲノム育种学(国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構野菜花き研究部門)

飯田博之教授、布目司教授、

川頭洋一准教授、柿崎智博准教授

○木質資源工学(国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所木材加工・特性研究領域)

安部久教授、藤本清彦准教授、

杉山真樹准教授、鳥羽景介准教授

○自然共生学(国立研究開発法人森林研

・整備機構森林総合研究所関西支所) 神崎菜摘教授、小笠真由美准教授 同窓会会員の皆様には今後とも一層のご支援、ご指導をお願い申し上げます。続きまして、本専攻3講座および学科3コースの近況について講座主任から紹介いただきます。

■農業生物学講座

講座主任 名田和義

令和元年度の終わり、3月頃から新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の感染拡大が起こり、令和2年度では対面での授業を行うことができなくなりました。農業生物学を学ぶ上で欠かすことができない実験実習科目を含めてオンラインでの授業開講を余儀なくされ、急ピッチでその準備に追われた年度初めでした。一方、オンラインでの実験実習では教育効果が大きく抑制されることから、対面実施に向けて当時の講座主任であった中島千晴教授を中心に準備計画し、いち早く対面実施申請を行い、7月初旬に対面での農場実習および学生基礎実験を再開いたしました。その後、オンライン開講に切り替えた時期はありましたが、令和2年度後期の実験実習科目は対面で、また、一部の必修講義を対面とオンラインのハイブリッド講義形式で実施できております。令和3年度からは、講義はハイブリッド開講、実験実習科目は対面開講が定着し、令和4年度からは一部の受講数が多い講義を除き、全面対面開講となり、安定した授業開講に戻りつつあります。このように新型コロナウイルスに基づく対面授業を開講する中で、農業生物学コースカ

キュラムにおけるFace to Faceの重要性を改めて認識するとともに、講座教員が実験実習の対面実施への強い意志を示し、一致協力して実現させたことよって、教員間の連携や結束が一層強まったと感じております。

次に、教育研究体制において、以下のよう

- ・園芸植物機能学教育研究分野 教授 名田和義(令和3年1月)
- ・植物医学教育研究分野 准教授 白水 貴(令和3年4月)
- ・分子遺伝育種学教育研究分野 教授 諏訪部圭太

(令和3年4月…大学院は地域イノベーション研究科所属)

- ・昆虫生態学教育研究分野 教授 塚田森生(令和3年6月)

平成30年から令和2年にかけて高松先生、平塚先生、山田先生と続けてご退職されましたが、着実に役を引き継ぎ、教育研究体制が整いつつあります。

農業生物学講座では、栽培植物、畜産動物、昆虫、微生物などの生態・生理・分子生物学的な生命現象を深く探求・理解し、その中から地域的・世界的な食料問題の解決や緑豊かな環境の維持に役立てる方法を導き出すことを目的に教育研究を行っています。これらの教育研究活動の中で、学生は生き物の尊さを実感し、他者との関わりを学び、自分を見つめながら、卒業論文、修士論文、博士論文をまとめて学位を取得し、社会に旅立つております。同窓会諸先輩方におかれましては、農業生物学講座卒業生に接する機会がありましたら、叱咤激励いただき、変わらぬご支援をいただきますよ

うお願い申し上げます。

■森林資源環境学講座

講座主任 野中 寛

森林資源環境学講座の最近の動向についてご紹介いたします。令和4年4月、木質分子素材制御学研究室の助教として、京都大学より徳永有希助教が着任されました。

また緑環境計画学の松尾奈緒子教員が、准教授に昇任されました。今年度は当講座の松村直人教員が研究科長・学部長、松田陽介教員が資源循環学専攻・学科長を務められています。徳永教員は今年誕生日を迎えてまだ20代の気鋭の若手研究者で、2年前に森林微生物学に着任された北上雄大教員とともに、講座に若い風を吹かせていただきたいと思っております。

令和2年3月頃よりコロナ禍が始まり、この2年間講座の教育・研究にも大きな影響がありました。令和2年度は授業が完全オンラインとなり、令和3年度は教室が密にならないようにと、奇数日に「奇数学籍番号が登校し、偶数学籍番号学生はオンラインで視聴する」という三重大式のハイブリッド授業となりました。講座の特徴である演習林実習は、密を防ぐためバスの乗車定員、宿泊定員が厳しく設けられ、例えば2泊3日の実習は、3班に分けてすべて日帰りで実施し、学内や座学でフォローするという対応を行いました。今年度より全面対面授業が復活しており、教室に大勢の学生がいて、休み時間に学生同士が雑談しているのを見ると、これが本来の大学だったな、と私自身思いつ部分があります。この間各研究室では、学生が登校してゼミや

卒論や修論の研究活動を行うことは認められていたのですが、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が発令され、大学外に出張することが難しい時期が続きました。現地調査の必要がある研究分野では、学生を連れて現場に行く回数が減り、海外をフィールドとする研究は困難となりました。また学会やシンポジウムもほとんどがオンライン開催となり、大学外に出かけて、他大学の先生や学生の前で発表し、会話する経験の場が失われています。こちらも今年度より大幅に正常化に向かっており、対面開催の学会が少しずつ出始め、久しぶりに海外調査を企画する教員がいるなどしております。

令和2・3年度には、林学系の教員を中心に、紀伊半島3県(三重県・奈良県・和歌山県)からの共同研究事業を受託しました。調査研究テーマは、森林経営管理制度を適正に運用し、効率的に森林整備を推進するため、紀伊半島の地域特性を踏まえた経営管理に適した森林の判定基準や現状の森林タイプに応じた目標林型の類型化、類型化した目標林型に誘導するための具体的な実施方法などをまとめた指針(マニユアル)の作成でした。紀伊半島の自然・社会条件に注目し、今後地域森林管理の中心となる市町村担当者を想定したマニユアルと要約版のリーフレット案を報告しております。今後とも、同窓会の皆様からの変わりぬご支援ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

▼自己紹介・徳永有希先生……………

2022年4月1日より資源循環学専攻、森林資源環境学講座、木質分子素材制御学研究室に助教として着任致しました、

徳永有希(とくながゆうき)と申します。出身は山口県山口市ですが学部生時代を三重大学で過ごし、その時に森林科学の奥深さと将来性に魅了されました。特に船岡正光前教授と野中寛教授(当時准教授)からは、木質バイオマスを生態系から逸脱しない流れの中で変換する姿勢を学び、毎日が新鮮な発見の連続であったことを覚えています。使命感とやりがいを持って活躍されているお二人の先生を見て「私もこの分野の第一線で活躍できる研究者になりたい」とアカデミアの道へ進む決心を致しました。大学院に進学する際には、専門の幅を広げたいという思いから京都大学の生存圏研究所へ進学し、リグニンとセルラーゼ間の相互作用解析の研究で学位を取得しました。その後、同研究所で1年間研究員として勤務し、今年度から三重大学にて教員として教育・研究に携われる機会を頂きました。

私の研究における最大の関心はリグニンです。リグニンは木質バイオマスの2から3割を構成する高分子ですが、その分子構造は複雑多様であり、木材組織、樹種、部位や環境の違いによっても分子構造が異なるとされています。その複雑さのせいか、リグニンを主原料とした素材はほとんど無く、主に製紙産業で燃焼利用されているのが現状です。リグニンをうまく素材利用するためにはリグニンの分子構造を詳細に理解することが不可欠ですが、そのためのツールとして私はNMRやリグニンモデル化合物を好んで使います。リグニン自体はこの上なく難解な高分子ですが、NMRやモデル実験で得た断片的な知見をパズルのように組み合わせることで、一部分だけ

でもリグニンの真の姿を捉えられないかと日々試行錯誤している時間が、研究者としての一番の楽しみみです。

今後は教員として学生と真摯に向き合い、研究者としても精力的に活動する所存です。若輩者ではございますが、ご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

国際・地域資源学講座

講座主任 関谷 信人

講座主任を務めます関谷信人(国際資源植物学)です。どうぞよろしくお願ひ致します。当講座(コース)の母体は、私が三重大学に着任する前年の2014年にスタートしました。その後、二度にわたる組織改編を通じて、大学院と学部それぞれ「国際・地域資源学講座」と「グローバル資源利用学教育コース」が開設され、現在私がそれぞれの組織の主任を務めております。

当講座(コース)では、2014年以前から構成員が幾度となく入れ替わり、その看板も何度も架け替えられていることから、「看板から中身を想像しにくい」というご批判を受けることが多々あります。そこで、同窓会の皆様には当講座(コース)の現体制を十分にご理解いただくため、この場を拝借して、その設立理念や教育目標について端的にご紹介させていただきます。当講座(コース)は、これからの農林水産業を実質的に支える人材の養成を大きな教育目標として日々尽力しています。農林水産業を単に一次製品の生産技術として理解するのではなく、加工、販売、流通、消費、

政策を含めた食農バリューチェーンとして理解することが重要です。食農バリューチェーンは、三重県内、東海圏内、日本国内といったローカルに閉じることは困難であり、グローバルな展開を避けて通ることができません。これからの農林水産業を実質的に支える人材には「グローバル×ローカル」な視点を有することが求められていると言えます。

そこで当講座(コース)では、グローバルな食農バリューチェーンを自然科学的に教育・研究する2分野と、社会科学に教育・研究する3分野を統合した体制を構築しています。

【自然科学系】

国際資源植物学 (関谷信人 教授)

国際資源利用学 (吉原佑 准教授)

【社会科学系】

資源経済システム学(常清秀 教授)

生物資源経済学 (中島亨 准教授)

循環経営社会学 (野中章久 准教授)

各分野を主催するいずれの教員も国内外に研究フィールドを抱え、最近では講座(コース)内の文理融合型共同研究により高水準な成果を発表するなど(「アフリカ『イネ黄斑病』大量発生要因特定 三重大グループ」中日新聞2022年4月8日朝刊)、講座(コース)の設立理念や教育目標を体現する陣容となっております。

新型コロナウイルス感染症パンデミックに続く、ロシアによるウクライナ侵攻。私たちの食生活に欠かすことのできない小麦粉や食用油などの価格が高騰し、家計に大きな打撃を与えています。地球の裏側で起こるグローバルな出来事が、なぜ私たちのローカルな食生活に影響を与えるのか？

どうすればグローバルな悪影響を回避し、ローカルな場面で好影響を活用することができるのか?このように、グローバルな視点から食農バリューチェーンを理解することの重要性が益々大きくなっています。当講座(コース)では、そうした社会的課題に対応できる人材の養成と研究成果の発信に努めて参ります。

同窓会の皆様には、当講座(コース)の教育・研究体制についてご理解いただき、今後ともより一層のご支援、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

共生環境学専攻

専攻長 森 尾 吉 成

新型コロナウイルス感染症が猛威を振るったこの2年間、本専攻におきましては、教育研究活動が中断することのないようにすぐにオンライン環境を整え、教職員が協力しながら教育研究活動に尽力してきました。ZoomやTeamsといったオンライン会議システムを使いこなす中で、新しい授業方式の発見、新しい会議のやり方、教職員や学生のこれまでにない形式の会話の実現など、強力なコミュニケーションツールを手に入れることができました。その一方、アナログ方式でないと体験できない本専攻の特色ある実習や実験の授業、研究室での研究活動、時間外の教員と学生の交流といった貴重な機会を十分提供することができませんでした。学生が苦勞して学習する様子を見るたびに、我々教員は辛くそして悔しい思いの日々を過ごしてきました。幸い、

地球環境学講座

講座主任 葛葉 泰久

コロナ禍においても、就職状況は、公務員や民間企業を中心に堅調に推移していることが救いでありませぬ。

現在、本専攻を構成する教員数は25名であり、学部学生の教育・研究体制は、1. 地球環境学教育コース、2. 環境情報システム学教育コース、3. 農業土木学教育コース、の3つの教育コースで構成され、博士前期課程の教育・研究体制は、1. 地球環境学講座、2. 環境情報システム工学講座、3. 農業土木学講座、の3つの講座で構成され、博士後期課程の教育・研究体制は、1. 気象・地球システム学講座、2. 環境・生産科学講座、の2つの講座で構成されています。コロナ禍の中、大学院進学率をなんとか維持しながら元氣な人材を輩出し続けております。

この度、本学科ならびに本専攻では、より高度なDX(デジタルトランスフォーメーション)人材を育成するためのプロジェクトを新たに開始しました。AI、デジタル工作機械、ロボット、各種デジタル計測機器が活用できる多様な人材を育成するカリキュラムや機器を整備することによって、Society5.0の時代を迎え、DX化がより急がれる社会において必ず活躍できる人材を育成していきます。同窓会の皆様におかれましては、後輩を温かく見守っていただき、今後ともより一層のご支援、ご指導をいただけますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

2015年の改組とその後の変更に際し、講座の理念であります「気象学をはじめとする地球科学・地球物理学に関わる諸学問の教育研究を行う」に合わない分野が2,3混入していたため、講座の教育研究の方向性が定まらないなどの不具合があり、整理して落ち着いたところで、大学のウェブサイトをご覧いただくと、いつも地球環境学講座の教員の成果がマスコミで公表される姿が公報されています(ほぼ一人の教員ですが)。そういう広報力を買ってくださったのでしよう。歴代の、ほとんどの研究科長や執行部には、「農学とあまり関係ない講座である」という(角を矯める)短絡的思考ではなく、「地球環境学講座が持つ広報力を利用した方が得」という、大所高所からの賢明なご判断をもって講座に接してきていただきました。まことに感謝するとともに、今後とも、winwin的に講座を利用していただければと思います。きっちり、今まで通り研究科に貢献する所存です。

以下は、現在の研究室(教育研究分野)と所属教員です。飯島慈裕教授が准教授から昇進しております。

○気象・気候ダイナミクス(立花義裕 教授)

猛暑や冷夏、寒波や豪雪や暖冬、異常多雨や干ばつ、北極の海水の減少、地球温暖化。これら地球規模での異常気象や気候変動が「なぜ?」起こっているのでしょうか。この「なぜ?」に対する完全な答えを人類はまだ得ていません。研究室ではこれらの

解明に挑んでいます。熱帯や北極の異変が

日本の異常気象に及ぼす影響などの、地球規模の気象研究と、黒潮などに及ぼす影響が異常気象や台風・豪雨などに及ぼす影響などのローカルな気象の双方を、練習船を用いた海洋上の気象観測や陸上の気象観測、そして地球全体や日本周辺の大気の流れや気温の変化の数値シミュレーションによって研究を行っています。

○気象解析予測学(西井和晃 准教授)

気象は私達の社会経済活動と密接に関わっています。このため、例えば気象庁は、数日先までの短期予報、一週間先までの中期予報、半年後までの長期予報など、各種の天気予報を公表しています。しかし、特に中長期予報の社会への応用はまだ不十分です。一方で、この天気予報作成のために世界各地で観測された過去の気象データが蓄積されています。こうした気象に関する様々なデータの解析を通じて、「気象メカニズムの理解の深化を通じた気象予測精度向上への貢献」と「気象予測データの社会への応用」を行うことが当研究室の目標です。

○海洋気候学(山田二久次 准教授)

今日大気中の二酸化炭素などの増加で気温が上昇し、地球温暖化がいろいろな異常気象の原因ではないかと言われています。海洋でも北極海の海水の減少や深層水温の上昇などの異常海洋現象が報告されています。

この研究室では、関連する海洋気候変動や海洋大循環の流速、水温、塩分、密度などの変化を調べています。手法には、三重大学の練習船「勢水丸」による直接海洋観測とその結果の解析、コンピュータを用いた数値モデル実験、日本海洋データセンターなどに蓄えられた長期観測データの解

析などがあります。大切な地球環境を守るため、皆さん、地球気候変動の核となる海洋のいろいろをいっしょに調べましょう。

○未来海洋予測学(万田敦昌 准教授)

地球の表面積の7割を占める海は、大気を暖めたり冷やしたり、水蒸気を大気に与えたりすることで、地球の気候に大きな影響を及ぼしています。海が寒波や猛暑、大雨や干ばつの原因となっていることも多いと考えられています。しかしながら、海と大気の変化の仕組みは複雑で、気候変動における海の役割を明らかにするために今後解明していかなければならない研究課題がまだまだ数多く残されています。研究室では、集中豪雨、低気圧、台風など様々な大気現象に対して海がどのような役割を果たしているのかを明らかにしていくとともに、海の将来の変化が気候変動にどのような影響を与えるのかを調べていきます。

○フューチャー・アース学(飯島慈裕 教授)

気候・地形・植生・雪氷等の環境変化が人間社会に与える影響を、現地調査を基本に、衛星データ解析、地理情報などの空間拡張の技術を用いた研究手法と重ね合わせて、近将来の時間スケール(30年)を念頭に、地球生命圏で起こりえる変化やその脆弱性・可塑性への分野横断的理解を進める研究を行っています。

○地球システム進化学(坂本竜彦 教授)

『地球とともに生きる』地球温暖化・エネルギー等の人類的課題に対し、持続可能な未来展望を明らかにするために人間を含む地球をシステムとして理解することが大切です。本研究室では、①「これまでの地球」について、生命進化、白亜紀温暖期、恐竜絶滅、氷河期の謎、など地球史イ

ペントを調べ、地球がいかに微妙なバランスのもとで成立しているか、を研究しています。また、②「これからの地球」〈持続的な地球システムについて、自然のエネルギーを活用した地球とともに生きる具体的なビジョンについて研究し、自治体、一般企業、市民の方々といっしょに実践的な未来ビジョン作りに取り組んでいます。

○水環境・自然災害科学(葛葉泰久 教授)

主に水に関わる環境・自然災害科学の教育・研究を行う研究室です。水は、人間が生きるため、また、食用の植物を育てるため、欠くことのできないものです。ところが、あまりに多すぎる水が人間の生活空間に入ってくると、我々はそれを制御することができず、洪水氾濫、高潮などの水災害が起こります。当研究室では、適度な水の恩恵を受けながら、その害の影響をできるだけ受けないようにするために、人間はどうしたらよいかを考えています。また、豪雨洪水だけではなく、地震の研究も行っています。高校の科目でいえば、地学(地球科学)、物理、数学が対応します。

○環境解析学(大野研 教授)

本研究室では、贅沢ではないが十分に自由で安全で快適な社会の実現を目指しています。我々は、世界の様々な側面を評価する。例えば、安全と快適は両立しないことが多いです。風を切って走るオートバイは楽しいものだが、通常より大きな危険を冒すこととなります。また、地域の環境をよくすることと地球の環境を良くすることもしばしば両立しません。そして世界の様々な側面の評価に基づいて、十分に自由で安全で快適な社会のための適切な地域の管理方法を考える。本研究室では、世界の様々な

側面を評価し地域の管理方法を考えるときに、景観を利用します。というのは世界の様々な側面が表出され、人々に認知されるのが景観だと考えているからです。

環境情報システム工学講座

講座主任 村上克介

同窓生の皆様には日頃より当講座の教育研究活動へのご理解とご協力を頂き厚くお礼申し上げます。

さて、まず当講座の研究室(教育研究分野)とスタッフの現況について報告させていただきます。

○応用環境情報学(福島崇志 准教授、滝沢憲治 助教)

生物生産機械システムに関する情報の計測、システム工学的手法による低環境負荷型生物生産システムの開発及び制御、環境に優しいシステム構築等に関する理論・技術、作物栽培における各種情報の計測・解析・予測および制御に関する研究

○生産環境システム学(陳山 鵬 教授)

生物生産や生産プラント設備点検・診断などのための知能ロボットシステム、社会安全安心のためのスマート設備状態監視・診断システム、圃場農業施設群GISとその応用、農用作業の自律化に関する研究

○生物環境制御学(村上克介 教授)

生物資源生産における生物と周辺環境・介入する人間等に関する情報を取得し、その環境情報を制御することにより植物工場などの最適な生物資源生産システムを構築する理論・技術に関する研究

○エネルギー利用工学(王 秀倫 教授)

環境に配慮しつつ、情報処理技術と工

学的手法を用いて、化石燃料に代わる再生可能な自然エネルギー資源の開発および利用、バイオマス材料の開発、低環境負荷型生物生産システムの自動化およびエネルギー有効利用のための各種機械装置の最適化に関する理論と技術に関する研究

昨年からの、鬼頭教授・山下助教として来年村上(著者)、再来年陳山教授と定年を迎え、即時の若手教員の補充も困難であり、伝統を守り続けられるかの正念場と感じています。国立大学を取り巻く環境は、一層厳しくなっています。その中ですが、私共教職員一同は、今後も同窓生の皆様のご期待に応えられるように、当講座益々の発展のために努力していきたいと存じます。同窓生の皆様からのより一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

○フードシステム学(森尾吉成 教授、内藤啓貴 助教)

食料の生産から、収穫、加工、パッケージング、輸送、流通、消費、廃棄へと繋がるフードシステムを対象とし、持続可能なフードシステム、フードシステムのスマート化、ロボット開発、農林水産物・食品の品質の情報化ならびに情報の取り扱い手法に関する研究

教育に関しましては、当講座では、高い能力を持つて社会に幅広く貢献できる技術者あるいは研究者を育成するために、2005年度から、日本技術者教育認定機構(JABEE)の基準に準拠して構成される「環境情報システム学」という教育プログラムを構築して教育を行っています。大学教育の改善と質保証のために、常に自己改善・相互改善を行い、今後も教育活動を精力的に行っていきます。

当講座の就職状況については、1964年設置の農業機械学科以来、数多くの先輩諸氏が有力企業で活躍されていることもあり、景気の好不況に関わらず、多くの関連企業からの求人があります。毎年、大学院修了生と学部卒業生の就職希望者の内定率はほぼ100%を保っています。近年特に大手企業は修士課程修了の大学院生を優先的に採用する傾向があるという原因もあって、毎年当講座の学部卒業生の約5〜7割が大学院修士課程に進学しています。

▼自己紹介・内藤啓貴先生………

二〇二〇年九月一日より共生環境学科フードシステム学研究室に助教として着任しました内藤啓貴(ないとう ひろたか)と申します。二〇一六年三月に京都大学大学院で博士号を取得後、日本たばこ産業株式会社で四年半研究員を務めたのちに教員として採用され、センシング技術とデータサイエンスにより食の豊かさを守ることを日々考えながら、教育研究活動を行っています。

昨今の世界情勢を鑑みて、日本国内での食糧供給の重要性が改めて認識されています。しかし、日本は国土が狭く農業に適する土地も多くはありません。そのため、Society5.0を目指す未来図では、農業・食料生産におけるブレイクスルーが求められています。私は研究分野である農業工学、農業情報学の知見を活かし、最新のテクノロジーを駆使しながら、不利な環境であっても情報に基づいて効率的かつ高付加価値な食料生産を実現していく支援をしたいと考えています。センシング技術としてはリアルタイム計測、高速通信との親和

性が高い光学、電磁気学を用いたものに着目し、IoT化により現場での農畜水産物生育環境、食品の品質などをモニタリングすることを目指しています。また、データサイエンスでは自然界から得られる複雑なデータから有用な特徴量を抽出するために深層学習などを活用したデータマイニング手法に着目しています。

具体的な取り組みとしては、将来的に研究の成果が地域の発展に結び付くよう、県内の産官にご指導いただきながら県が誇る日本酒の付加価値向上を目指し、製造工程中の品質モニタリング技術の構築に取り組んでいます。また、肉牛の状態を心拍や呼吸などのバイタルをセンシングする手法を構築し、県の特産品である畜産物を健康かつ高品質に供給しつづけるための支援をしていきたいと考えています。

私は経験が浅く、諸先輩方に迷惑をおかけすることも多々あるかと思いますが、温かいご指導を賜りますようお願い申し上げます。

農業土木学講座

講座主任 岡島 賢治

三翠同窓会の同窓生の皆様におかれましては、日ごろから当講座の教育研究活動へのご理解とご協力を賜り心より感謝申し上げます。農業土木学講座の近況についてご報告申し上げます。農業土木学講座では、農業を営む場である農村地域を保全し、健全な物質循環の場としての豊かな農村環境の創造を目標とした教育・研究を行っています。

当講座の教育体制の近況としては、

2020年度末に成岡市教授(農地工学教育研究分野)がご退職され、2021年度末に加治佐隆光教授(水資源工学教育研究分野)がご退職されました。そして、

2021年度田中宣多助教(土資源工学教育研究分野)がご着任され、現在7教育研究分野10教員(2022.4.1現在)の体制で教育研究活動を行っています。加えて三重大学唯一のJABEE(日本技術者教育認定機構)の認定プログラム「農業土木学プログラム」を維持し、2022年秋に2度目の継続審査を予定しております。

それでは、当講座の教育研究分野とスタッフの近況をお知らせいたします。

○応用地形学(森本英嗣准教授)

ため池決壊リスクに関する指標化に関する研究と農業生産活動の維持、暮らしをしていくために必要な食糧、エネルギーの自給システムの構築を目指し、中山間地でのバイオマスエネルギー、太陽光エネルギーの利用可能性に関する研究を行っています。2021年～2022年はスマート農業実証プロジェクトに参画し、ソーラーシェアリングの実証試験を行っています。

○土資源工学

(酒井俊典教授・田中宣多助教)

地盤災害から地域や人々を守るため、民間企業や土木研究所と共同で、大規模な風水害を起こす台風の移動経路と斜面災害の関係性の解明や、斜面災害の発生抑制のためのグラウンドアンカーの維持管理に関する研究を行っています。また、地盤改良工法による地盤内の地下水制御に関する研究や斜面災害と植生の関係に関する研究などを通じて、斜面における土と他の構造物や植生との相互作用に関する研究を行っています。

ています。

○水資源工学

(近藤雅秋准教授、伊藤良栄助教)

地域の社会ニーズを満足できる水環境の保全に関して、地域の土地改良区などと同様のため池のヒシ繁殖の水質環境に与える影響の調査、非かんがい期水路における死亡貝の悪臭対策のための水環境に関する研究、農業用水路を使った地域火災防災に関する研究などを行っています。また、流域治水のための田んぼダムの効果の検証、揚水機場などでの水利用実態の把握などについて、ICT技術を活用した課題解決に関する研究を行っています。2021年～2022年はスマート農業実証プロジェクトに参画し、水路における画像からの水位計測を行っています。

○環境施設工学(岡島賢治教授)

農業水利施設の施工・維持管理における農業用水路の機能診断技術開発に関する研究、農業用ダム の 保 全 管 理 向 け た 地 震 時 の 挙 動 解 明 関 連 の 研 究、 農 業 用 パ イ プ ラ イ ン におけるタイワンシジミによる通水障害対策に関する研究を行っています。2021年～2022年はスマート農業実証プロジェクトに参画し、農業用水路の多面的機能の効果検証に関する研究を行っています。

2021年～2022年はスマート農業実証プロジェクトに参画し、農業用水路の多面的機能の効果検証に関する研究を行っています。

○国際環境保全学(保世院座狩屋教授)

国内外の様々な環境問題に対して、「土」「地盤」「材料」の面から持続可能な土構造物の改良に関する研究を行っています。廃棄物となるもみ殻灰の地盤改良材料としての利活用や玄武岩から作られるバサルト材の地盤改良材料としての利活用、効率的な太陽光発電の支柱の設計に関する研究な

ど地球環境保全やSDGsに示す研究を行っています。また、多くのJICAの留学生を大学院生として受け入れ、毎年多くの国に優秀な人材を輩出しています。

○土壌圏循環学

(取出伸夫教授・坂井勝講師)

作物・大気系・土壌といった私たちの作物生産における土壌圏の環境を健全に持続していくことを目指し、土壌圏の水分・熱移動や窒素などの化学物質移動のメカニズムを明らかにし、地球環境に寄与する土壌圏での物質移動予測モデルの構築を目指した研究を行っています。そのために必要な現地圃場に設置可能で周辺との水分環境を同期できるライシメータの開発や、ダイズ栽培期間中の水分移動特性の変化など実験室・現場圃場をリンクさせた研究を行っています。

○土壌圏システム学(渡邊晋生教授)

土壌を中心とした物質循環である土壌圏システムを健全に持続していくことを目指し、作物生産の現場で窒素等化学物質の形態変化から、それらの化学物質の圃場内での空間分布といった圃場スケールでの研究を行っています。また、土の凍結が周辺地盤に及ぼす影響やその凍結過程における水分移動など凍土発生・拡大メカニズムの解明と、凍土による遮水壁の構築といった凍土の利活用についての研究を行っています。

▼自己紹介・田中宣多先生……………

三翠同窓会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。2022年1月1日より農業土木学講座土資源工学教育研究分野に助教として着任した田中宣多(たなか よしかず)と申

します。私は、宮崎大学を卒業後、京都大学大学院へ進学し、博士(農学)の学位を取得しました。その後、京都大学防災研究所でのポストドクを経て、三重大学に参りました。三重大学にご縁をいただいたことに感謝しつつ、これからは、学生と一緒に教育・研究を楽しみたいと思います。出身は、愛媛県松山市で、三重に住むのは初めてです。少しずつ三重の良さを発見できればと思います。

学位に関わる研究では、都市屋上でイネを水耕栽培した場合の周辺熱環境に対する影響について明らかにしました。防災研では、地盤の地震時挙動を明らかにすることを目指し、遠心荷重装置を用いた模型実験や有限要素法を用いた有効応力解析に取り組みました。地盤の不均質性を考慮した研究や、植生の違いによる樹木根系の影響に着目した研究を精力的に行っていました。

また、水田の気温形成を明らかにするための気象観測や、畑地用水量策定のための土壌水分測定にも携わりました。今後は、三重県内外の斜面防災に関する研究や、傾斜地農地に関する研究に取り組みたいと考えています。現在は、過去に三重県内で発生した豪雨に伴う斜面崩壊地を対象に、崩壊の誘因として樹木植生の影響について学生と協力して調べています。将来的に力学的な検討も行い、防災対策の一助になればと考えています。今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願いいたします。

生物圏生命科学専攻

専攻長 柿沼 誠

生物圏生命科学専攻(大学院)ならびに関連学科(学部)である生物圏生命化学科および海洋生物資源学科の近況についてご報告申し上げます。

平成29年4月に行われた生物資源学部の学科改組により、生物圏生命科学科(定員100名)を構成する2つの教育コース(応用生命化学教育コースおよび海洋生物科学教育コース)が学科として分離独立し、生物圏生命化学科(定員80名)と海洋生物資源学(定員40名)となりました。この学科改組に伴い、大学院生物資源学研究所を構成する3専攻のうち、生物圏生命科学専攻のみが2つの学部学科の上に設置されている形となりました。なお、本専攻を構成する3つの講座のうち生命機能化学講座と海洋生命分子化学講座は生物圏生命化学科(化学系)の教育研究を、海洋生物学講座は海洋生物資源学(生物系)の教育研究を担っております。令和3年3月に新学科学体制の第1期生となる学部学生117名(生物圏生命化学科78名、海洋生物資源学39名)、令和4年3月には第2期生となる学部学生121名(生物圏生命化学科78名、海洋生物資源学43名)が卒業し、卒業生の約4割が大学院博士前期課程(本専攻)に進学しました。現在、本専攻の大学院博士前期課程には100名、大学院博士後期課程には11名が在籍し、学位論文に関する研究に取り組んでいます。学科改組により学部卒業生の大学院進学率がやや改善されたようにみられますが、コロナ禍にお

ける就職活動の変化と社会に出ることへの不安による影響も無視できず、研究力の維持と次世代を担う若手研究者の育成のために、大学院進学率と受験者数を増加させることが研究科全体で取り組むべき大きな課題の1つと認識しております。

令和元年度末から始まった新型コロナウイルス感染症対応により入学式や卒業式は中止、学科・専攻や研究室主催の卒業祝い会も自粛、卒業証書は学生へ郵送という形となり、講義や実験・実習はオンラインまたはハイブリッド形式で進められました。令和4年3月の卒業式と同様4月の入学式は新型コロナウイルス感染拡大防止対策を取りつつ対面形式で実施され、令和4年4月から講義や実験・実習は原則対面形式での実施となりました。しかしながら、現在のキャンパス内の風景はコロナ禍以前のそれとは程遠く、学部・大学院における教育・研究活動には例外許可申請等が必要なこともあり、ウィズコロナに対応した(アフターコロナを見据えた)新しい学部・研究科への変化が求められていると実感しております。

生物資源学部はこれまで、附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター(農場、演習林、水産実験所)と附属練習船を活用して、人間活動と自然環境の複雑な相互関係の解明に向けた分野横断的な取り組み(フィールドサイエンス)を推進し、さらには三重県全体を教育研究フィールドとする地域拠点サテライトも活用して地域連携活動を展開し、地域創生と地域人材の育成に戦略的に取り組んできました。しかしながら、ウィズコロナへの対応に加え、地域社会の抱える問題の複雑化、教育研究分野の多様化・細分化と専門技術の飛躍的

進歩、科学的データ分析(データサイエンス)に基づいた地域創生を担うDX人材の育成への対応に迫られています。このような背景のもと、令和6年4月の学科改組(1学部1学科制)に向けて現在、学部の教育・研究組織改革が進められております。この学科改組については、次号の会報でご報告できると思われれます。

本専攻に関係するこの2年間の人事異動についてご報告いたします。令和2年10月に水産実験所(令和3年4月に志摩市座賀島から鳥羽市小浜港に移転)の准教授として岡田拓巳先生が、令和3年4月には助教として山本康介先生が赴任されました。岡田先生および山本先生はそれぞれ、本専攻の水産応用情報学および浅海増殖学の関連教員としても活躍いただいております。また、令和3年4月に水産物品質学の教授として青木恭彦先生が大学院地域イノベーション学研究所から戻られました。本専攻の連携大学院関係では令和4年4月に国立研究開発法人水産研究・教育機構水産技術研究所から連携教授として岡本裕之先生が新たに参画され、連携教授の正岡哲治先生、連携准教授の村下幸司先生と共に発酵・代謝機能解析学にて教育研究に取り組まれております。ご昇進関係では、令和3年3月に生物物性学の大井淳史先生が教授に、食品発酵学の梅川碧里先生が准教授に、令和4年4月には附属鯨類研究センターの船坂徳子先生が准教授に昇進されました。なお、大井先生は令和3年4月から教養教育院(令和4年4月に全学共通教育センターに名称変更)に異動され、令和4年4月からは学長補佐(教育担当)として新たな共通教育の全学展開にご尽力をされております。

生命機能化学講座

講座主任 苅田修一

す。ご退職関係では、令和3年3月に生物性学の岡垣壮教授と浅海増殖学の吉松隆夫教授が、令和4年3月にはそれまで(令和元年4月から3年間) 研究科長を務められておりました分子細胞生物学の奥村克純教授が定年退職されました。なお、奥村先生は令和4年3月に日本農芸化学会功績賞を受賞され、同年4月から招へい教授として本研究科で引き続き活躍いただいております。管理運営面では、食品発酵学の苅田修一教授が副学長(教育担当)、水族生理学の神原淳教授が教育研究評議会評議員として大学執行部(令和4年度体制)に参画され、三重大学の管理・運営において重責を担っていただいております。また、栄養化学の梅川逸人教授が理事(情報・環境国際担当)・副学長として令和元年4月より2年間、大学執行部に参画された後、令和3年3月に定年退職されましたが、現在も参与(情報・図書館担当)・特命副学長として三重大学の管理・運営に深く関わっていただいております。研究科執行部については現在、神原淳教授が副研究科長(教育担当)、食品生物情報工学の橋本篤教授が副研究科長(研究担当)として参画され、新型コロナウイルス感染症対応を含め研究科の管理・運営にご尽力されております。

続いて、本専攻を構成する3つの講座(生命機能化学講座、海洋生命分子化学講座、海洋生物学講座)の詳細と近況について、講座主任から紹介いただきます。

生命機能化学講座は、農学部時代の農芸化学を源流としており、新設された分野もあります。また研究分野名称も時代の流れの中で変遷しておりますが、農芸化学の時代からの研究室の流れを汲んでいる研究分野もあります。

未曾有のコロナ禍にあり、過去2年間にわたり、オンライン授業、ハイブリッド授業を始め、実験実習の少人数化など、さまざまな対応をとりながら、講座として、教育と研究に取り組んでまいりました。特に、本講座では実験実習を重視した教育を展開する中であって、いかに効果ある教育を行うかに知恵を絞ってまいりました。一昨年は、4班に分けた少人数体制で、昨年度は2班に分けるなどして、実験参加人数を制限しながら、実験の機会の確保をしてまいりました。その分、教員側の負担も大きく、従来の1回の学生実験を、少人数で4回するなど、かなり厳しい対応をしてまいりましたが、なんとか乗り切ることができました。各研究室では、申請許可制のもと、学生と教員の日々の体調を記録、報告する形で、研究活動を継続することができました。ただ、多くの学会や研究会等が、中止またはオンライン化する中で、発表の機会を失った学生には、気の毒な感じではありましたが、一方で、オンライン化に伴い、学生のICT活用能力の向上が見られ、オンラインによるゼミや、情報交換などが日常化したのは、コロナ禍での大きな進展で、海外の学生との交流や、オンラインの国際学会への参加などが進んでいます。また就

職活動においても、面接のオンライン化が進み、従来とは異なる就職活動状況になっております。

本年度から、授業は、対面授業を中心とした以前の形態に戻りましたが、教室の机に貼ってあるQRコードを読み込むことによる着席記録、教室に入る前の体温チェックや手指消毒など、感染対策を十分におこなった上での対面授業で、間隔をあけるなど、従来の教室定員を減らした中で授業が行われております。

前回の同窓会報でのご報告以降の講座の人事につきましては、令和3年3月に、食品発酵学教育研究分野の梅川碧里助教が、准教授に昇格いたしました。令和3年3月末をもって、梅川逸人教授が定年退職となりました。梅川先生は、研究科長(学部長)をはじめ、大学本部の理事をされるなど、大学の運営などを含め、多くの功績を残されました。また、令和4年3月末に奥村克純教授が、定年退職されました。奥村先生も、同様に、講座だけでなく、研究科長(学部長)をはじめ、大学本部の理事をされるなど大学に大きな功績を残されました。本講座の中心を担ってきた先生が相次いで定年退職となりました。

現在の講座は、11教育研究分野16名の教員で構成されております。

○分子細胞生物学

竹林慎一郎 准教授

○分子生物情報学

三宅英雄 准教授

○生理活性化学

稲垣 稔 教授

○創薬化学

増田裕一 准教授

○生物機能化学

勝崎裕隆 准教授、岡咲洋三 准教授

○生物制御化学

寺西克倫 教授

○食品生物情報工学

橋本 篤 教授、末原憲一郎 教授

(大学院は地域イノベーション学研究所)

○食品化学

磯野直人 准教授

○微生物遺伝学

木村哲哉 教授、國武絵美 助教

○栄養化学

西尾昌洋 准教授、栗谷健志 助教

○食品発酵学

苅田修一 教授、梅川碧里 准教授

これに加えまして連携大学院として、

○食品機能化学

(太陽化学(株) 連携大学院)

大久保 勉 教授、小関 誠 教授

研究においては、多くの論文を出す中であって、竹林先生と寺西先生が、令和3年度三重大学優秀論文賞を受賞されました。今後も、研究成果の論文発表を積極的に取り組んでいく所存でございます。

令和4年度の本講座における学生数は、4年生56名、大学院生45名と、かつてない大きな所帯となっております。大学院の進学者が、コロナ禍で増加し、研究室では大学院生の研究活動により活気が出てきております。また、多くの企業からお声がけをいただき、就職状況も比較的順調であります。これも先輩諸氏のご活躍のおかげだと思っております。

本講座では、研究室への3年生の配属は、例年10月からとなっております。現在3年生が49名在籍しておりますので、大学院生、4

年生、3年生と全体で150名の学生が秋から研究室で活動をはじめるといふ状況になつております。コロナ禍で中止しておりました講座のスポーツ大会などの行事も、本年度はなんとか再開したいと考えております。

講座全体として、今後も、しっかりとした教育、研究に取り組むと共に、社会で活躍できる人材の育成につとめてまいります。後輩を見かけました時には、お声がけをいただければと思います。

最後に同窓会の先輩の皆様におかれましては、引き続き変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

海洋生命分子化学講座

講座主任 船原大輔

三翠同窓会会員の皆様におかれましては、日頃より当講座の教育研究活動へのご理解とご協力を賜り心より感謝申し上げます。

当講座は学部では平成29年4月に設置された生物圏生命化学科の海洋生命分子化学教育コースにおける教育を主に担当しています。令和3年3月には、当教育コースとして初めての卒業生を送り出しました。

当講座での前号からの変化を報告いたします。令和3年3月に生物圏生命化学教育研究分野の岡垣壮先生が定年退職されました。同年4月には同教育研究分野の大井淳史先生が教授に昇進されました。大井先生は令和4年4月から全学共通教育センターの所属となりましたが、兼務教員として引き続き当講座で教育研究活動に従事していただいております。

現在は8つの教育研究分野で11名の教員

が海洋生物資源の有効利用を目指して、海洋生物機能の化学的解明と、それに必要な学理と技術の教育研究に取り組んでいます。令和4年度の当講座の教育研究分野の構成は次の通りです。

○海洋生物学

柿沼 誠教授、五十嵐洋治助教

○水圏生物利用学

田丸 浩教授

○水圏材料分子化学

伊藤智広准教授

○生物物性学

大井淳史教授

○生体高分子化学

船原大輔教授

○海洋微生物学

福岡智司教授、田中礼士准教授

○水産物品質学

青木恭彦教授、岡崎文美准教授

○海洋食糧化学

柴田敏行准教授

当講座の近況についてご報告します。研究に関しては運営費交付金削減などで相変わらず研究環境は厳しいままですが、科学研究費補助金の獲得、民間企業や公共団体との共同・受託研究を推し進め、研究活動の維持と社会貢献に努めています。研究成果は日本水産学会、日本農芸化学会、日本生化学会、日本生物工学会、マリンバイオテクノロジー学会などの学会活動、学外イベントやメディアで発信しています。

この2年間あまりはコロナ禍の影響で、学会大会やイベントなどが軒並み中止またはオンライン開催となり、研究発表の機会が極端に少なくなつてしまいました。そのような状況下においても、教員あるいはそ

の指導学生は数少ない機会をとらえ、積極的に研究発表しています。学生にとっては、人前で研究発表することは教育的効果が高いためだけでなく、貴重な経験として自身の成長に大きく資するものですが、オンライン発表ではその効果が半減するように感じます。そのような機会がほばなかったことは残念に思いますが、そんなことは学生には関係がないようで、日々の勉強や研究活動を通して、立派に成長して諸先輩方にまさるとも劣らない能力を身につけており、私達は自信を持って社会に送り出すことができている。

当講座を構成する研究室は、旧水産食糧学コースを起源とすることもあって、教員は水産の化学分野(水産化学)という意識が強いですが、海洋生命分子化学教育コースに所属する学生は、生物圏生命化学科ということもあって、水産という意識は全く持ち合わせていません。教員からすると一抹の寂しさを覚える反面で、学生は生命化学を勉強したくて入学してくるため、化学が好きで得意な者が多く、結果としてより深く水産化学というものを教育できる状況になつているように思います。「今の若いもんは」と言われがちなのですが、初等中等教育のたまものか、プレゼンテーション能力が高く自己を表現する力に長け、時代が変化していることを強く感じさせます。教員も彼らに負けないように精進して、次世代を創る人材を輩出することができるよう努めています。

卒業生の進路については、大学院修士と学部卒業生ともに就職志望者のほぼ100%が就職しています。就職先は多岐にわたりますが、食品・化学・医薬・化粧品

農林水産業・関連団体などの業界への就職が比較的多いようです。一方で、大学院進学者数が減少しており、ここ最近では卒業生の20%程度が進学するにすぎません。近年では大学院卒の人材の重要性が高まっており、学生にはぜひとも大学院でより高度な教育を受けて、社会で活躍する可能性を広げてもらいたいと切に希望します。

三翠同窓会会員の皆様におかれましては、これからも引き続き変わらぬご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

海洋生物学講座

講座主任(兼・海洋生物資源学科長) 吉岡基

前号では、生物圏生命科学専攻長としてご挨拶と近況報告をさせていただきましたが、本号では、講座主任として、また平成29年4月に新設された海洋生物資源学科の学科長として、講座ならびに学科の近況についてご報告申し上げます。

この2年間、収まる様子を一向に見せない新型コロナウイルス感染症の拡大により、教職員、学生の大学での時間はこれまでにない大きな制約、変更を余儀なくされる時間となりました。そうした中、第3期中期目標・中期計画期間における三重大学機能強化構想の「戦略1・地域人材育成と若者を地域に止め置く機能の強化」のひとつとして「日本初の「生物資源」学部の発展的再編によるオンリーワン学科・専攻の創設」の下に生物圏生命化学科とともに設置された海洋生物資源学科の第1期生40名を令和3年3月に送り出すことができました。同年4月には新入生(第5期生)41名を迎え入れ、翌令和4年3月には第2期生

41名が卒業、そして本年4月には早いもので第6期生41名を迎え、現在前期の講義期間中となります。前年度は、講義や実験、実習は基本的にオンライン形式で実施されましたが、この4月からは、文部科学省からの通知もあり、基本対面方式での授業形態となり、教員と学生はマスクをしたままではあります。それ以外の教室の様子は、コロナ禍以前の雰囲気に戻りつつあります。しかし、これまでずっとオンラインで講義を受け、それに馴れていた学生たちにとっては、対面方式の講義が新たな形に映るようで、私自身が4月13日に初めて行った講義(受講生40名)では、学生たちが後方座席に集うよくある光景はなく、教卓から少しは距離をとってはいるものの、前方席から、すべての列に整然と座って、90分の講義を居眠りもせずにしつかりと聞いているという光景がとても新鮮に映りました。このことは、ほかの学科の学生たちにも共通することではないかと思えます。

講座(学科)の教員の異動について次にご報告いたします。令和3年3月31日をもって、浅海増殖学教育研究分野の吉松隆夫教授が定年退職されました。また令和4年4月1日付けで、魚類増殖学教育研究分野の船坂徳子助教が准教授に昇進されました。教育および研究において、深く関連している附帯施設水産実験所と連携大学院関係では、まず水産実験所には、令和2年10月に岡田拓巳准教授が着任され、本講座内に新たに「水産応用情報学」教育研究分野ができました。この教育研究分野の名称は、昨今のDX(デジタルトランスフォーメーション)への取組を海洋科学・水産学の分野でも強化するためのものでもあります。さら

に、令和3年4月には、山本康介助教が着任しました。水産実験所は、これまで長く専任教員1名体制でしたが、鳥羽市に移転後は教員3名体制で新たな教育研究活動を展開しています。連携大学院のひとつであった増養殖研究所は、国立研究開発法人水産研究・教育機構の組織変更により、水産技術研究所の一部となるとともに、宇治督連携教授の異動に伴い、新たに岡本裕之氏が連携教授に就任されました。これらの異動により、令和4年度の講座教員の構成は、4月1日現在で次の通りとなっています。

○生物海洋学

石川 輝 教授、田口和典 助教

○水族生理学

神原 淳 教授、宮崎多恵子 准教授

○藻類学

倉島 彰 准教授

○浅海増殖学

松田浩一 教授(水産実験所)、筒井直昭 准教授、山本康介 助教(水産実験所)

○先端養殖管理学

一色 正 教授

○魚類増殖学

吉岡 基 教授、淀 大我 准教授、森阪匡通 准教授

○海洋生態学

船坂徳子 准教授

○水圏資源生物学

木村妙子 教授

○水圏分子生態学

古丸 明 教授、伯耆匠 二助教

○海洋個体群動態学

河村功一 教授

○海洋個体群動態学

河村功一 教授

原田泰志 教授、金岩 稔 准教授

○応用行動学

森川由隆 准教授

○水産応用情報学

岡田拓巳 准教授

○附属鯨類研究センター

森阪匡通 准教授

○附帯施設水産実験所

松田浩一 教授、岡田拓巳 准教授、山本康介 助教

○附属練習船勢水丸

前川陽一 准教授(船長)、中村 亨 助教(二等航海士)

○水産技術研究所(連携大学院)

正岡哲治 連携教授、岡本裕之 連携教授、村下幸司 連携准教授

教育については、現在、海洋生物資源

学科には、1年生から4年生まで全部で165名(内訳:1年生41名、2年生43名、3年生40名、4年生41名)が学んでいます。大学院生は博士前期課程が41名(うち留学生1名)、後期課程8名(うち留学生3名)在籍しています。このような状況の中、日本の科学力の増強のため、大学院生を多く受け入れ、若手研究者を育成・輩出することが、現在、国からも強く求められています。令和3年度に文部科学省とJSTのそれぞれから、博士後期課程学生を増やして研究者を育成する支援事業として、「三重大学大学院博士課程学生フェロロシップ」及び「三重大学大学院博士課程学生育成支援」の2つがほぼ時を同じくして始まりまし

た。三重大学も大学としてこの事業に採択されました。この制度に採択された学生は、年間180万円の生活支援

金と20ないし35万円の研究費が支給されるもので、学位取得後のポストも大学が一定数準備しておくという制度になります。海洋生物科学講座(海洋生物学講座の博士後期課程における講座名称)に所属する学生はこの2つの制度下の事業に令和3年度は4名、今年度は1名採択されています。自分が博士課程の大学院学生として在籍した当時を思うと、とても優遇された制度だと思えますが、この制度・事業が活用され、これからの新たな海洋生物学、水産学を担う研究者が生物資源学研究所から輩出されることを願うばかりです。

以上、海洋生物学講座ならびに海洋生物資源学科の近況報告とさせていただきます。三翠同窓会の皆様には、今後ともご支援、ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

附属教育研究施設

附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンターから

F Sセンター長 渡 辺 晋 生

三翠同窓会会員の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。前任の松村直人教授の後を受け、令和4年度よりセンター長を拝命しております。土壌圏システム学研究室の渡辺です。専門分野は農業土木、特に土壌物理学です。各施設長、練習船運営委員長、施設専任教職員と協力し、センターの発展に尽力して参りたいと思っておりますので、どうぞよろしく

お願い致します。

令和4年度現在の附帯施設の長として、農場長に名田和義先生、次長に長菅輝義先生、演習林長に石川知明先生、次長に沼本晋也先生、水産実験所長に古丸明先生、次長に松田浩一先生、練習船運営委員長に石川輝先生、船長に前川陽一先生がそれぞれ活躍されております。

専任教職員の人事関係として、演習林では洲上佑樹先生が令和2年8月1日付で准教授へ昇進、水産実験所では令和2年10月1日付で岡辺拓巳准教授、令和3年4月1日付で山本康介助教が採用となりました。また、練習船勢水丸では令和3年3月31日付で足立光正甲板長と田中香月三等航海士が退職され、令和3年4月1日付で高野雅貴三等航海士と三橋達甲板員が採用となりました。なお、足立光正氏は再雇用職員として生物資源学部事務室にて勤務されております。

技術部では加藤元保技術長と上尾智洋副技術長のもと、教育研究、地域貢献、各種生産販売に取り組んでおり、令和3年4月1日付で小嶋優人氏が演習林の技術員に採用となった他、令和4年4月1日付で小川清宏氏が水産実験所の技術専門員に昇進されました。なお、農場では令和3年3月31日付で宮崎洋介技術専門員が退職されました。

事務部では令和3年4月に山下泰子係長、令和3年7月に田中和雄係長と福島愛チーム員、令和4年4月に土性広英専門職員が着任されました。

また、水産実験所は移転となり、令和3年4月16日に、鳥羽市小浜漁港に新実験所を開所しました。学生の宿泊施設整備のた

めのクラウドファンディングには、関連企業他、同窓会の多くの皆様のご協力を頂きました。三重県や鳥羽市の水産実験所、国立研究開発法人水産研究・教育機構増養殖研究所との連携をさらに深めて、水産研究の一大拠点となるべく活動しております。

コロナ禍のこの2年間は、FSセンターの大事な側面である「実物を見て触って考える」という場を十分に整えることが難しい状態が続いてきました。しかし、今年度から1年生が各施設に訪れるFSC体験演習が再び対面で実施され、水産実験所や演習林での宿泊を伴う実習、勢水丸の複数泊での航海も再開されました。今後、農場と演習林の三重短大との共同利用協定に基づく宿泊実習生の受入、演習林での全国演習林協議会での合意に基づく全国募集での森林総合実習、勢水丸の教育関係共同利用拠点施設としての他大学学生の受入など、教育研究活動を順次コロナ以前の状態に戻していけるよう期待されます。また、農場における社会人を対象にした「大学ファーム」や小学生を対象にした「教育ファーム」、演習林や水産実験所における、地域の小中高生を対象とした公開講座など、FSセンターのもう一つの側面でもある社会貢献活動も再び活発にしていきたいと思います。

FSセンターは、様々なフィールドデータの宝庫でもあり、コロナ禍で進んだオンラインコミュニケーションの利用拡大やインフラ設備と合わせ、生物資源関連産業をDXで支える地域人材の育成や、脱炭素社会に向けた教育研究などへの貢献もますます期待されます。これまでも本学の教育研究課題への取り組みはもとより、他大学の学生教育や共同利用、社会貢献・地域連携

事業を担ってきた実績を持つFSセンター各施設の存在は、近隣の他大学にない大きな強みとなっています。FSセンターは今年で20周年を迎えますが、これまで同様に教職員が一丸となって教育・研究・地域貢献に努力して参りますので、同窓会関係各位の変わらぬご支援・ご鞭撻をお願い申し上げます。

農場だより

農場長 名田和義

三翠同窓会の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。令和4年4月1日に農場長を拝命しました。2年間という短い任期ですが、農場の運営に尽力する所存でございます。

最近の農場の状況について皆様にお知らせしたいと存じます。農場は三重県津市の高野尾町に位置し、伊勢自動車道の芸濃インターの傍らにございます。35.2haの広さの場内に水田、果樹園、水耕栽培温室、飼料作物圃場、牛舎、農産製造室などがあり、同一敷地内で様々な農畜産物の実習、生産から加工、販売まで行っている全国でも極めて稀な大学附属農場です。講義室や調理室が入っている管理棟や学生宿泊所も平成25年度に改修され、学生が快適に受講したり宿泊したりできるようになりました。学生は充実した環境で実習を受けることができ、評判も上々です。令和4年4月時点での職員構成は、専任教員が3名、技術職員が9名(内非常勤職員2名)、事務職員が8名(内非常勤職員3名)となっております。昨今では、自分たちの食べ物が

どこからどのようにやってくるのか知らない学生や現場を持たない研究への危惧もございませぬので、実習のみならず共同研究や共同利用なども通じて、フィールドという特徴を活かした農場における教育・研究活動が今後ますます盛んになることが期待されます。

農場で生産された生産物やそれらを加工した缶詰、ジャム、味噌などの品々は、場内の直販会(第三水曜日)のみならず市内のスーパーマーケット、農産物直売所や道の駅などでも販売されています。農場は松阪牛の生産地域として指定された地域に位置しているという利点を生かし、三重県の特産品である松阪牛の飼育と出荷をしております。様々な場所で三重大学農場産の生産物や加工品が販売されることで「三重大学」の名前が世間に広まっており、農場の生産物が三重大学の広報にも役立つといえます。そして、令和2年3月にはJGAP認証を取得しました。GAPとはGood Agricultural Practiceの頭文字を取ったもので、農林水産省では農業生産工程管理と呼んでいます。長年にわたって農場は「食の安全」、「環境保護」、「労働安全」を担保する様々な取り組みを実施し「農場の見える化」に取り組みできましたがGAPのひとつであるJGAP認証の取得はその結果の一つの現れと考えております。

近年、大学は様々な社会貢献が求められる中、本農場もその例外ではありません。これまで行ってきた教育・実習のコンテンツや研究成果を社会に還元することを目指しております。そこで、農場では社会人を対象とした大学ファーム「楽農講座」で農業技術の紹介や普及活動を行い、農業へ

の関心向上を図っています。楽農講座の農業体験や食品加工の実習は、参加者から好評を得ております。また、津市内の小中学校・津市教育委員会・J・A・東海農政局と協力・連携し、小学生を対象とした三重大学教育ファームも開催しています。地域の小学生が、農業体験や食品加工の体験を通じて、普段口にしていない食料がどのように生産・加工されているのかを学び、農業に対する理解や食べ物大切にすることを育む活動にも力を入れています。昨年度は小学校1校の全学年を対象として田植えやサツマイモの収穫、豆腐作りなど計8回の実習を行いました。夏休みには、小学生にトマトの収穫からトマトジャムの加工・販売までを体験してもらった公開講座を農業直売所と連携して開講し、講座を修了した学生には「トマトマイスター」という称号を授与しました。夏休みの良い体験となったと好評でした。また、中学生を対象とした農業インターンシップの受け入れも行っています。生徒や社会人を対象としたこのような取り組みのほかに、夏季に開講される共通セミナーへの三重短期大学学生の受け入れと本学による単位認定など、他大学を対象としたサービスも行っております。コロナ禍により一時はそれら全てを中断することを余儀なくされましたが、現在ではその多くを再開させており、コロナ禍前の活気を少しずつ取り戻しております。

昨年は、紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター(FSC)の創立20周年にあたり、これまでの教育、研究、社会貢献・地域連携活動についての外部評価を受けました。農場は11月15日に実施し、外部評価委員として龍谷大学の尾形凡生先生

と三重県商工会議所連合会の吉仲繁樹様をお招きいたしました。学内からは奥村克純研究科長、松村直人FSC長、渡邊晋生農場長、長菅輝次次長、野呂真穂事務室長、中津公伸係長が参加しました。長菅次長より活動報告がなされた後、教育、研究、社会貢献・地域連携、今後の将来構想の観点から総合的に討論がなされました。外部評価委員の先生方からは概ね高評価をいただき、今後の発展的な農場運営に向けて有意義な評価委員会となりました。また、東紀州サテライトの地域拠点サテライト事業に対し、農場から吉田智晴技術専門員と樋口伸一技術員が参加することになりました。吉田技術専門員は尾鷲の特産品である甘夏を使った農産加工品の開発及び甘夏園のJGAP認証取得への支援、樋口技術員は熊野市の新たな特産品として期待されるアシタバの栽培現場の調査と栽培の検討を担当することとなり、若手技術職員が活躍の場を農場外においても積極的に広げております。

前号(15号)では、座賀島にありました水産実験所の鳥羽市小浜地区への移転が進展していることを報告させていただきましたが、その後も順調に作業が進捗し、令和3年2月末に新しい水産実験所が竣工しました。そして、令和3年4月16日に鳥羽市長、三重県農林水産部次長(国研)水産研究・教育機構南勢拠点長外多数の来賓をお招きして開所式を執り行い、正式に移転が完了しました。新しい水産実験所は、敷地面積1,299㎡、建物(延)554㎡と座賀島での水産実験所より規模的には随分とコンパクトになりましたが、32名の学生を収容して実習等ができる学生実験室、教員や学生が研究を行うための3つの実験室もあり、使い勝手がいい水産実験所になっています。また、0.5mmの精度でろ過された海水を24時間かけ流しで使用でき、プランクトン培養室や計測室を併設した飼育室もあり、海洋生物を対象とした飼育実験を充実して行うこともできるようになりました。

水産実験所の宿泊施設に関しても、鳥羽市教育委員会のご協力により、小浜地区で廃校となっていた旧小浜小学校の2Fと3Fの一部を三重大学の学生・教員等が宿泊する施設として改修し、利用できるようになっています。コロナ禍が続く、まだ十分に活用できる状況にはなっていませんが、令和4年度からは宿泊を伴う実習も再開し、今後、地の利を生かした教育研究活動を活発に推進できるものと期待しています。体制的にも大きく変わりました。令和2年10月には水産ビッグデータの収集と解析、ICT導入等のスマート水産業を専門としている岡田拓巳准教授(水産応用情報学教育研究分野)が赴任されました。また令和3年4月にはマリンバイオリファイナリーを専門とし、かつ水産実験所の地域連携活動も担当する山本康介助教(浅海増殖

水産実験所だより

水産実験所 松田 浩一

三重同窓会の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また、日頃より水産実験所へのご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

農場の活動やトピックについては、随時ホームページ(<http://www.bio.nie-u.ac.jp/academics/facilities/fsc/farm/>)に情報が掲載されます。ご興味をお持ちの方は是非アクセスしてください。



写真1 新しい水産実験所の外観



写真2 水産実験所2Fの学生実験室から見た鳥羽湾。沖には答志島(左)と菅島(右)がよく見えます。手前は小浜漁港

学教育研究分野)も赴任され、水産実験所の専任教員が3名になりました。地域発展の核となつて活動する大学を目指し、地域との連携や共創の活動を重視する三重大学において、水産関係の現場の最前線にある水産実験所の役割が重要となっております。それを心に留め、3名の教員が水産実験所で教育研究活動を推進するとともに、伊勢志摩地域を中心とする水産関係の現場の多様な課題やニーズに対応していきたいと考えています。

水産実験所の移転計画とともに策定された2つの構想「鳥羽海洋教育研究センター」と「伊勢志摩海洋教育研究アライアンス」も着実に進展しています。前者は、新しい水産実験所がある鳥羽市と生物資源学研究所とが連携し、両者が持つ研究成果と現場での実践力に関する相乗効果を発揮し、学生への実践的な水産教育等による地域人材の育成、厳しい環境にある水産業を再生させる共同研究の実施を目的とするもので、令和3年5月25日に両者の間で覚書を締結しました。後者は、その活動を伊勢志摩地域全域に広げ、地域内の国公立水産研究機関や民間の水産研究組織とともに、地域に根ざした世界に誇れる水産学の教育研究拠点をこの地に創出するというもので、令和4年度中に関係機関との調印を目指して調整を進めています。

新しい水産実験所は、移転してから約1年が経過し、施設運営としては落ち着いてきました。また新型コロナウイルス感染症で制限されてきた教育活動もようやく通常に近い状況に戻りつつあり、それに伴って、今後、水産実験所での活動も本格的なものとなつていくことと思います。地域で頼りにされ

水産業の発展に不可欠な機関として認知されるよう、水産実験所の教職員一同、努力してまいりますので、同窓会の皆様方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしく願います。

▼自己紹介・岡辺拓巳先生……………

二〇二〇年一〇月に附属教育研究施設附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター附帯施設水産実験所に准教授として着任いたしました。出身は高知県で、豊橋技術科学大学で建設工学を学び、修士課程を修了しました。その後、気象情報企業などの民間企業に勤務しましたが、同大で海岸の土砂管理に関する研究プロジェクトに研究員として加わり、学位を取得することができました。プロジェクト終了後に助教となり、今回、水産実験所に採用いただきました。伊勢湾の対岸からの異動となりましたが、新たな分野での研究に取り組めることを嬉しく思います。

これまで、沿岸域の土砂動態や環境を中心に、海岸工学(土木)分野で研究を実施してきました。干潟でのアサリ稚貝の着底に関する研究など、振り返れば漁業との関わりが強い研究活動が多かったのですが、中でも漁業から生まれるビッグデータを活用する取り組みを長く続けてきたことが、今回のご縁に結びついたと感じています。

ご存じの同窓会会員の皆様も多いかと思いますが、現在、水産庁では情報通信技術を漁業に活用する「スマート水産業」を推進しています。様々な漁業において、デジタル化とその情報の活用(データトランスフォーメーション…DX)が必須になりつつあり、三重県の漁業でも、その展開と実

装が急務となっております。漁業と海洋環境の情報化とAIなどを用いた分析技術、水産資源管理やバリューチェーン形成といった活用手法に関する研究を、環境モニタリング技術や情報通信技術、データサイエンスなど、これまで培ってきた知見を応用して深化させるとともに、その成果が地域の漁業やコミュニティを盛り上げるものできればと考えています。

三重県に引越して二年弱が過ぎましたが、釣りをするだけでなく魚介類が食卓に並ぶ機会が大幅に増えました。魚や貝、海藻が身近な地域であることを強く感じると同時に、漁業が直面する課題をいち早く解決しなければならぬと実感する日々です。水産実験所の教員・スタッフと協力してこの課題に立ち向かうことももちろんですが、同窓会の皆様のお力添えも大きな推進力となります。未熟な点が多々あるかと思いますが、研究・教育に精進して参りますので、ご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

▼自己紹介・山本康介先生……………

令和3年4月に附属教育研究施設附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター附帯施設水産実験所に助教として着任いたしました山本康介(やまもとこうすけ)と申します。同時に、伊勢志摩サテライト伊勢志摩産業振興教育研究センターの所属教員でもあります。自分自身も座賀島の水産実験所にはお世話になっておりましたので、鳥羽市小浜町に開所した新しい水産実験所と時を同じくしてスタートを切れることに不思議な縁を感じております。三重県桑名市出身で、三重大学生物資源学部

に入学後、水圏生物利用学研究室にて田丸浩教授にご指導いただき博士号を取得しました。在学中は、嫌気性微生物について分子生物学的な視点での基礎研究を行い、同時に、地域でのバイオマスの利活用に関する共同プロジェクトに参画しておりました。学位取得後は、三重大学院生物資源学研究科にて産学連携研究員として地域バイオマスの利活用に関する研究を行い、三重大学地域戦略センター研究員を経て、三重大学地域拠点サテライト東紀州サテライト研究員として地域活性化のための調査研究、教育活動および地域貢献事業を、地方自治体、地元企業等との連携により実施してきました。これらのつながりを大切に、引き続き地域資源としてのバイオマス利活用に関する研究を推進したいと考えております。

伊勢志摩国立公園・吉野熊野国立公園に代表されるように、三重県には豊かな自然環境と人々が共存する世界に誇るべき日本の姿があります。このフィールドを生かして、学生の「現場力」を涵養する教育プログラムの開発と実施を、生物資源学部の実験・実習と連携しながら実現します。そして、プログラムを経験した大学生とともに、地域の児童・生徒、農林水産業従事者や地元小中高等学校教員、自治体職員、他大生や留学生等が学び合えるような、産学官民連携による体験学習・リカレント教育の場をアレンジしたいと考えています。地域社会は人口減少・少子高齢化に起因する多数の課題を抱えており、三重大学には、「地域課題の解決」や「地域人材の育成」に対する地域からの大きな期待があります。現地に赴き、地域の人々の目線に立つて問

題を把握し、同時に、地域を俯瞰することによって真に解決すべき地域課題を正確に捉え、解決策を提示していくような研究者・教育者になりたいと考えておりますので、ご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

平倉演習林の現況

演習林長 石川 知 明

三翠同窓会の皆様には、お元気で活躍のこととお慶び申し上げます。令和2年度から3年度の演習林長を松田陽介教授(森林資源環境学講座森林微生物学教育研究分野)が務められました。令和4年度より石川(森林資源環境学講座森林利用学教育研究分野)が務めております。令和3年度を中心に演習林の現況についてご報告いたします。

【人事】

演習林の管理運営や学生実習対応でお世話になった宮崎豊技術専門員が令和3年4月から農場勤務に配置換えになられました。令和3年4月より新規採用として、小島優人さんが技術職員として着任されました。若くて新鮮な感覚で業務にあたっていただけることを期待しております。次長の沼本晋也准教授、測上佑樹准教授、技術職員の上尾智洋さん(FSC副技術長・演習林グループ長)、山本拓史さん、上尾京子さん、非常勤職員の新田昌臣さん、日置千鶴代さんの方々には継続して管理運営や学生実習対応などに携わっていただいております。なお、新型コロナウイルス対応のため、宿泊を伴う実習などを見合わせている関係で、

いつもお世話になっている賄いさんに来ていただく機会がなくなっています。少しでも早く、以前の状況に戻ることを願っています。

【教育 研究】

三重大学では、伝統的に現場で活躍できる人材の育成に重点を置いた実習のカリキュラムを組んでいます。ただ、新型コロナウイルス対応のため、宿泊を伴う実習などを見合わせて、日帰りで、あるいはオンラインで行うなどの対策をとっています。令和3年度に実施された実習は次のとおりです。

- 4月.. FSC演習林実習IV (計測)
- 5月.. FSC演習林実習I (植物)
- 6月.. 特別調査研究特別実験 (大学院・博士後期)
- 6月.. 演習林体験演習A、B班 (生物資源活動タイム)(オンライン)
- 9月.. 自然科学概論(森は生きている)(農林体験セミナー)(オンライン)
- 9月.. FSC演習林実習VI (公開森林実習)
- 10月.. FSC演習林実習III (利用・林道)
- 10月.. FSC演習林実習I (植物)
- 12月.. FSC演習林実習V (溪流保全)
- 12月.. FSC演習林実習II (測量)

他学部、教養機構の科目、他大学学生の受け入れなどは、新型コロナウイルス対応のため中止しました。研究面の利用については、生物資源学部では、スギ人工林の長期固定試験地調査、降水の安定同位体比を用いた紀伊半島の降水システムの解明、天然林の動態に関する研究、樹木の生物季節調査、ブナ乾燥応答性遺伝子の塩基多型の地理的変異、森林生態系の物質循環を指標とした安定的な木質バイオマス供給、定期水文観測

がありました。その他では、人工林内の土砂移動試験(三重県林業研究所)、ナラ枯れ状況の把握およびカシノナガキクイムシの防除(伊藤進一郎名誉教授)がありました。

【地域連携 社会貢献活動】

演習林では、地域連携社会貢献のため貴重な教育・研究の場を提供し、地域圏大学としての地域社会への青少年教育・生涯教育への貢献に関して、一般開放ならびに公開講座などが行われてきました。ただ、令和2、3年度は、新型コロナウイルス対応のため中止しました。新型コロナウイルスの収束後には、これまでと同様、学生実習や教育研究、一般開放や公開講座などを実施することで教育研究地域貢献に寄与していきたいと考えています。

【林況】

全国的なシカ増加による森林被害は顕著で、三重大学演習林も甚大な被害を受けています。植栽種の被食が著しいこともあり、平成12年を最後に植栽実習は行っておりません。また、人工林の主伐も停止しています。天然林では、稜線を被っていたミヤコザサはすっかり姿を消し、三峰山頂では土壌が露出しています。平成29年度では、9月に接近通過した台風18号の暴風によって、藤堂スギ2本が幹折れました。また、演習林内において、ミズナラのナラ枯れ発生を確認しました。現在、標高500m、700mあたりで確認していますが、今後さらに高い標高にナラ枯れ被害が拡大することを危惧しています。このような現況ですが、これからは、水源に位置する演習林の豊かな森林環境を少しでも良い状態で維持管理して参る所存ですので、今後とも卒業生、関係の皆様のご指導、ご支援

を頂戴できましたら幸いに存じます。何卒よろしく申し上げます。



写真 演習林宿舎

練習船勢水丸近況ご報告

船 長 前川 陽 一
一等航海士 中村 亨

こんにちは。練習船勢水丸です。会員の皆様におかれましては、お元気で過ごしのことと存じます。前回のご報告から2年が経ち、月日の経つのは本当に早いものだとつくづく感じています。簡単ではありますが、最近の活動について報告させていただきます。

ご存知の通り、新型コロナウイルスが流行し、その影響はまだまだ続いています。当初、船は「三密」の最たるものと揶揄されてきました。船の運航に関する感染予防の観点から様々な制限が運航となつていきます。いくつか例を挙げますと、



①宿泊を伴う航海の乗船者定員は最大7人とする。これについては、本船の学生居室は4人部屋、2人部屋合計7室なので個室化して7人となりました。②航海中に発熱者が出た場合などを考慮して航海海域は2日以内に松阪港に帰港できる範囲とする。③実習生は乗船開始日の2週間前から検温・行動記録をつける、など입니다。さらに、写真の通り、学生教室の机には乗組員作のパーテーションを設置し、船外への出入り口には状況が許す限り換気ができるようプラントネットでのカーテンを設置しました。加えて船内の各所にアルコール消毒液を配置して手指の消毒に努めています。

このような中、昨年度は、何とか対面での実習を再開することができました。昨年度の運航の実績は、実習航海が32航海、延べ87日、乗船学生延べ207人、調査・研究航海が2航海、延べ7日、乗船者延べ12人、その他の地域・社会貢献などの航海の実施はありませんでした。実習航海では、7人しか乗船できないので、これまでのような日程では消化することができず、日程を縮小して航海回数を増やさざるを得ず、そのやりくりで苦労しました。しかし乗船した学生は、普段のオンライン形式の授業にも疲れていたのか、船上でクラスメイトと対面できてとてもうれしそうな表情をしていました。

実習海域についても制限が続き、毎年恒例だった東シナ海方面での海洋総合実習(底引き網漁での漁業実習)は、海域が遠すぎて実施できず、代替として熊野灘でのビームトロールでの漁業実習を行っています。伊勢湾や熊野灘といった実習に適した海域が近くにあるので日程の縮小にも何とか対応できてとても助かっています。いつになったらコロナ禍が終息して平常の日々に戻るのか全く分かりませんが、すべてが解禁になるまでは粛々と航海を続けていきます。

令和2年の水路記念日には、海洋観測データ(CTDによる水深ごとの水温・塩分データおよびADCPによる流向・潮流データ)を長年にわたり、海上保安庁海洋情報部に提供してきた功績が認められ、同庁長官から感謝状と記念の楯をいただきました。このことは練習船でも正確な精度の高い海洋観測を行っているという証しであり、乗組員一同これからも誠心誠意活動していく所存です。

乗組員の年齢構成は、最年長者が小職の61歳、最年少者は三等航海士の25歳です。数名の退職者の補充で、若い世代を採用し平均年齢が若干下がりに現在43歳となっています。

本船の航海予定は、以下のサイトに掲載しています。また日々の活動につきましては公式facebookに公開していますので、お時間がありましたらご覧下さい。

最近では、船の大きさや用途も全く異なりますが遊覧船の沈没事故や大型船の座礁事故、年々規模が大きくなりつつある台風に対する警戒など、船を取り巻く環境は決して良いとは言えない状況と思います。しかし、我々はどういったことに振り回されないよう安全第一をモットーに、教育効果の高い実習航海、質の高い調査航海を行っていく所存です。会員の皆様からの叱咤激励をお願いします。

最後にありますが、会員の皆様方の益々のご健勝とご活躍をお祈りいたします。

附属鯨類研究センター

鯨類研究センター長 吉岡 基

本船ホームページ
<http://seisumarubiome-u.ac.jp/>
 本船公式Facebook
<https://www.facebook.com/seisumaru/>

附属鯨類研究センターは、三重大学の第3期中期目標期間(平成28年度から令和3年度)の機能強化構想として立てられた3本の戦略のうち、「戦略3・地域の力の発信機能の強化」の一環として、平成28年12月に研究科内の附属教育研究施設のひとつとして設置されました。生物資源学研究科内には、農場、演習林と水産実験所からなる紀伊黒潮生命地域フィールドサイエンスセンターと練習船「勢水丸」という4つの立派な、まさに「施設」がありますが、鯨類研究センターは、三重大学総合研究棟ⅡB内に4部屋を借りて研究活動を行っているごく小規模な施設です。人員は、令和2〜3年度の2年間は、鯨類学を専門とする3名の教員(うち1名はセンター設置にあわせて新規採用)以外に、分子生態学、行動生理学、生態学、生化学等を専門とする4名の教員の計7名と研究員1名、技術補佐員2名の合計10名で構成されていました。令和4年4月からは、第3期の終了とともに教員は鯨類学を主とする3名と技術補佐員2名体制に減員し、令和4年度、すなわち第4期の活動を行っています。

このセンターは、イルカ追い込み漁業からの水族館への飼育個体への搬入が困難になったことをきっかけに、水族館等におい

て鯨類の持続的飼育を進めるための繁殖研究基盤を整備することを大きな目的として設置されました。この間、各水族館や関係団体の努力、並びにセンターの研究活動も相俟って、かつてはともでもできるとは思えなかつたイルカの人工授精が複数事例成功し、もはやごく普通の臨床応用技術になりつつあります。しかし、イルカの子どもを産ませただけでは、持続的飼育にはつながらず、産まれた子どもを健康で長く飼育することが必要になります。このためには、繁殖生物学や生理学にとどまらず、獣医学、行動学など幅広い分野の研究が必要であり、研究スタッフは現在国内で鯨類を飼育している水族館等のうち約半数にあたる施設との間で、さまざまな課題、研究手法を用いて共同研究を実施しています。また、

前号では、生物資源学部校舎から、泳いでいるスナメリの姿を観ることもできるようになったと書きました(ちなみに、この原稿を書いている今も、別の教員が観ています)。これまでは、それを双眼鏡で観るだけでしたが、近年のドローンの急速な普及により、その姿を空中から撮影・観察することができるようにもなり、この手法を駆使することによって、三重のイルカ(スナメリ)の理解も今後より深まることが期待されています。

商業捕鯨が日本で再開されてから2年が経過しました。イルカ飼育や捕鯨反対の動きは、最近では鳴りを潜めているようにも思いますが、鯨類研究センターでは、研究科内の規程にも定めているように、「鯨類を海洋生物資源として捉え、その持続的利用に関する教育・研究を行い、成果等を通じて広く地域社会に貢献すること」を目的と

してこれからも活動を行ってまいります。コロナ禍にあつて、全国各地の水族館や野生鯨類の研究フィールドへの出張がままならなかつたこの2年間ですが、センターの認知度は着実にあがり、研究成果も広く発信できているのではないかと自負しております。

この夏、7月2日(土)〜9月11日(日)の約2ヶ月間、三重県総合博物館(ミエム)において第31回企画展「集まれ!三重のクジラとイルカたち」が開催されます。生物資源学研究科は「特別協力」という形でこの展示企画に全面的に協力し、三重のクジラであるスナメリを筆頭に、伊勢湾と熊野灘に生息・来遊しているクジラやイルカたちの姿をいろいろな形で紹介いたします。お時間がございましたら、同博物館に足をお運びいただければ幸いです。

令和4年度から始まっている第4期中期目標・中期計画期間においては、第3期の機能強化構想からは分離独立した形でセンターの運営をしていくこととなります。国内唯一の鯨類という特殊な哺乳類を扱う研究センターとして、今後も教育研究活動を展開してまいりますので、同窓生の皆様におかれましては、引き続き本センターの活動を見守っていただければ幸いです。

大学院 地域イノベーション工学研究科

研究科長・教授 小林 一成

地域イノベーション工学研究科は、高度な研究開発力とともに課題解決力を身に付けた「プロジェクトマネジメントができる研究開発系人材」を育成するため、平成21年4月に設置されました。平成29年度からは、博士前期課程に「地域にゼロから1を創造できるソーシャルアントレプレナー人材」を養成する「社会イノベーションユニット」を新設し、文理融合型の教育・研究ができる体制を整備しました。当研究科は生物資源学部卒業生の進学先となっておりますが、研究科として最近注力しているのが

「社会人の学び直しリカレント教育」です。リカレント教育への全学的な取り組みのため、令和4年4月には「三重大学リカレント教育センター」が発足し、当研究科がこのセンターを下支えすることとなりました。三翠会員の皆様にも、ぜひ本学での学び直しをご検討下さればと願っております。

現在、三翠会員として、教授の小林一成(農31)、諏訪部圭太(生H10)、末原憲一郎および准教授の加賀谷安章(博H10)、狩野幹人(機H6)が当研究科に在籍しております。また、以前に専任教員をお務め頂いた荻田修一教授(化30)、青木恭彦教授と三島隆准教授(化院29)には引き続き当研究科の教育にご尽力頂いております。

恩師を偲んで

飛岡次郎先生を

偲んで

森林利用学教育研究分野

石川 知 明

飛岡次郎先生は、2020(令和2)年12月3日、ご逝去されました。

先生は、1958(昭和33)年3月に三重大学農学部林学科を卒業され、同年4月に農林水産省林野庁農林技官として入省されました。1972(昭和47)年12月に三重大学農学部助教授に転任、1984(昭和59)年2月に教授に昇任、1999(平

成11)年3月に定年によりご退職されました。この間、三重大学において26年余の長きにわたって教育研究に奨励され、幾多の有為な人材の養成と後進の指導にあたられました。また、学生部長、演習林長をはじめ、各種委員会委員を歴任され、大学運営に貢献されました。

研究においては、非皆伐施業における伐出作業の体系化に関する研究や、森林の休養的利用と緑空間の評価に関する研究をはじめとして、多くの優れた業績を残されました。社会貢献においては、日本林学会評議員、国際林業研究機関連合(IUFRO)

役員、三重県森林審議会会長などを務められ、学識経験者として幅広く活躍されました。

私が初めてお会いしたのは1974(昭和49)年頃でした。先生は内地留学されており、私は学生としてゼミに参加していました。いつもニコニコされていて几帳面な方という印象でした。懇親会で、「知床旅情」を森繁久彌さん風に熱唱されたことは今でも鮮明に記憶しています。

その後、先生と再会したのは、1998(平成10)年4月に私が三重大学に着任した時でした。以前お会いしていたことをお話しすると、「そうでしたか。でもあまりお見かけしませんでしたね。」とおっしゃいました。几帳面で、毎日研究室にいられていた先生が、見かけない、ということ、私がいかにいい加減な学生だったかが分かってしまい、とても恥ずかしい思いをしました。

宿泊を伴う演習林実習では、夜に先生が「演習林節」を唄われるのが慣例だったと伺っています。残念ながら、私は拝聴する機会には恵まれませんでした。

学生指導は心のこもった優しいものでした。やる気のない学生の指導について、私が「馬を水辺に連れて行くことはできても、水を飲ませることはできない。」と言ったところ、先生は「私は水を飲ませてきました。」とおっしゃって、教育はやる気を出させることが大切だということを教えてくださいました。

先生の三重大学、そして学生を愛する心は、とても温かいものでした。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

渡辺 巖先生を 偲んで

土壌圏生物機能学研究室・前教授
小畑 仁

渡辺 巖先生は、平成8年定年退官されるまで5年間ほどの短い期間ではあったが土壌学・植物栄養学研究室教授として在籍された。退官後東京に移られたため、年に一度賀状でご挨拶するだけになっており、先生の訃報は令和3年元旦の賀状を準備している時突然届いた。令和2年8月19日突発性間質性肺炎のため87歳で永眠とあった。

先生は私たちの分野では大変高名な方で、お名前は書かれた本などでかかえてより存じ上げていたが、東大農学部のご出身で、農林省に奉職されたあといくつかの国際機関に勤められ、直近はフイリピンにある国際稲研究所で部長をされていた程度の認識しかなく、うちに来て頂くことが分かった時にはびっくりした。世界を舞台に活躍されていた方なので、どれほど厳しい方かと内心びくびくしていたが、私にも学生にも穏やかにまたにこやかに接してください、安堵したことを思い出す。

研究の視点は鋭く的確で、それを研究計画にまとめ上げる手腕は並外れており、高額な研究費を立て続けにとつてこられた。

一貫してアカウキクサ「アゾラ」の利用に関する研究を進められた。共生する藍藻の還元力を利用する試みで、アンモニアの生成のみならず水素分子の生成能にも着目され、今喧伝されている水素社会実現を目指す研究の先駆けとなる画期的なものであったが、在任期間が短かったため、その後の発展がみられなかったことが悔やまれる。

また研究室の運営にも新風を吹き込んで頂いた。プレゼンテーションとはなにかと今ままで考えたこともなかったことを教えてくださいだったり、そのための新しい技術を導入して頂いたりした。

令和2年5月には梅林先生が他界されており、お教えを受けた先生が相次いでこの世を去られた。今となつてはご冥福をお祈りするほかない。

西川司朗先生を しのんで

生理活性化学教育研究分野 教授
稲垣 稜

西川司朗先生は、令和3年9月12日に72歳で逝去されました。コロナ禍緊急事態宣言下でもあり、ご葬儀は御身内で行われました。

先生は、昭和47年3月に三重大学農学部農芸化学科を卒業されました。農芸化学第20回生の皆さんは、過日なくなられた熊沢善三郎先生がクラス担任を務められた学年であり、各方面で活躍された方が多数おられます。なかでも、親しいご友人であられた、京都大学名誉教授の西田律夫先生とは、深く交流され、出席番号も連続で、研究室も同じ、植物や自然を愛するお二人であった様です。西川先生が、平成5年に1年間、米国テキサス工科大学に留学された際には、西川先生のご担当であった有機化学の授業を毎週京都から西田先生が来て下さり、学生に講義して頂きました。すぐに大学院修士課程に進まれ、昭和49年に修士課程を修了されました。修士課程の修了後に、元農学部の農芸化学科の農薬化学研究室に

助手として採用されて、それから33年間教鞭を執られました。

私(稲垣)が平成3年に生理活性化学研究に赴任した時には、教授は、柏村直樹先生、助教授が西川司朗先生でした。生物資源学部に組織改編した際に、農薬化学から生理活性化学に改名されたのです。柏村先生は、新しいもの好きであれこれイベントを企画したり、買い物したりするのに対して、西川先生は、いつも通りのことをしつかり行うのを目指して、違っていました。西川先生は、学生に対する指導の際には、自ら実験を見せて指導してくれる先生でした。実験方法や同時に複数の仕事をこなさなければ成らない操作では、学生が難しいです、できません、と言うのですが、それを西川先生は、こうして、こうやって、こうするんだよ、と鮮やかにやってのけて見せてくれるのでした。

仕事では、慎重でしつかりした先生ですが、ご趣味ではなかなか活発でヤンチャな面があった様です。釣りと登山が先生の大好きな趣味で、研究室のメンバーで登山に行ったことも何度もあり、北アルプスにまで遠征したこともあったと聞いています。私は、先生と一緒に鈴鹿の龍ヶ岳に登ったことを覚えていますが、まず前日に、宇賀浜にテントで1泊し、朝ご飯を皆で食べてからおにぎりを握って、さあ出発です。その時の先生の登る姿は颯爽と、とても速くて、当時若かった私も、もつと若い学生たちも到底追いつくことができません。皆が疲れた頃を見計らって、「休憩、休憩ね」と声を掛けられ、「何か食べよう、チョコレートとか、お煎餅とかを食べると指示が出ます。小休止の後はまた颯爽と登って行

かれます。息一つ切らせていない先生がすごかった、そして、なんとか全員で登頂できました。また、学生と一緒に賢島に釣りに行ったこともあり、貸し切りの様な岩場で釣りをしている内に潮が満ちて道が無くなったとき、10メートルくらいある岩のガケを、「ココを登れば大丈夫」とさらっとおつしやり、スイスイ。学生たちは、待つて下さい！となったと聞きました。

そのほか、先生とは、川村食堂（生協の翠陵会館の2Fにあった）で毎日お昼御飯をご一緒する際に、色々武勇伝をお聞きしました。知床の雪山単独行で怪我をして、あのときは本当に困った、とすごい話も。ご趣味でもチャレンジ精神あふれる先生は、研究では着実に少しずつを地地道々と思われま。ただ、チャレンジ精神と困難に冷静に取り組む姿勢が、西川先生の研究の推進力の根底であったと判断されます。遅咲きの先生の研究成果は、1990年に京都大学農学博士の取得、同年に、植物ホルモンサイトカイニン活性物質の構造活性相関研究に関して、日本農芸化学会奨励賞を受賞され、大いに実を結びました。

柏村先生のご退職に続いて、西川先生は教授に昇進されました。同じくして、私も助教授に昇進しました。その頃の大きな出来事と言えば、ニューヨークの911事件です。世界ではその後色々な紛争も起こり、戦禍に苦しむ方も多かったのですが、ここ近年になって、新型コロナウイルスによる災厄、さらに、ウクライナにおけるリアルな武力衝突がおこり、平和であること、何も無いことがこれほどまでにありがたい物であることを実感することになるうとは、だれも想像できませんでした。しかし、

そんな災厄の中で西川先生が健在であられたならば、「大丈夫、慌てないで過ごすしか無い」とあっさり言われると想像します。教授に昇進された西川先生でしたが、数年勤められたところで体調不良になり、平成19年にご退職になりました。それ以来、ご病氣療養中と伺っておりましたが、残念ながらお亡くなりになりました。先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。先生の飄々とした、しかし、強い芯のある姿勢を見習って、後進の私たちも一歩ずつ前に進んで行かねばなりません。

嶋田協先生を 偲んで

応用微生物学教育研究分野前教授

栗冠和郎

嶋田協先生は、令和4年1月24日に誤嚥性肺炎のため90歳で逝去されました。

嶋田先生は、昭和26年に三重農林専門学校を卒業された後、三重大学農学部発酵学研究室職員となられました。昭和31年に三重大学農学部農芸化学科3年生に編入学されました。卒業後、再び三重大学農学部発酵学研究室職員として勤められた後、昭和36年に同研究室の助手に任ぜられました。その後、助教授、教授に昇進されました。部局の改組もあり、平成6年に定年を迎えられた時の研究室名は生物資源学部応用微生物学研究室でした。三重農林専門学校入学から三重大学生物資源学部で定年を迎えられるまでの46年間を、三翠の学園で濃密かつ充実した生活を送られたことになりました。この間、ハワイ大学医学部（昭和43〜44年）とマサチューセツ工

科大学（MIT、昭和58年）の2回の米国留学を経験されています。また、大阪市立大学（昭和41〜42年）と東北大学農学部（昭和52年）へも内地留学されています。

今日の私があるのは、ひとえに嶋田先生のおかげです。嶋田先生との出会いは、先生が東北大学農学部内地留学された時のことで、私は修士課程の1年生でした。当時は、学部や学科内でのスポーツが盛んでしたが、卓球では先生の右に出るものはなく、先生がサーブをするとともに受けられずボールがあらぬ方向へ飛んでいったものでした。また、松島湾での船釣りで、船上で固まっている姿を思い出します。運動神経の良い者は船には弱い、が持論でした。この出会いがあり、大学院修了時に、三重大学農学部発酵学研究室に助手として採用していただきました。

先生の研究テーマの主なものとして、「糸状菌由来のプロテアーゼとそのインヒビターに関する研究」、「六価クロム耐性菌と硫酸還元菌に関する研究」、「好熱嫌気性細菌によるセルロース分解に関する研究」が挙げられます。第一の研究での優れた業績により、日本農芸化学会奨励賞（青カビの生産するプロテアーゼ・インヒビターに関する研究）を昭和46年に受賞されました。先生の研究の全てに共通することですが、まず、自然界から優良な微生物を単離することから始まります。誰でも、良い菌を得たいと思ひ分離を試みますが、なかなか上手くはいかないものです。微生物の特性の理解と微生物に対する愛情、生物的なセンス、努力と体力が必要ですが、先生はその全てをお持ちでした。「嫌気性細菌によるセルロース分解に関する研究」を開始するのに際し

て、MITのアーノルド・ドメイン教授（産業微生物学の泰斗）の研究室に留学され、嫌気性細菌の取り扱いのイロハを習得されました。帰国後すぐに、好熱嫌気性セルロース分解細菌の分離に着手され、多数のクロストリジウム属細菌を単離されました。これらの菌を用いた研究を私が引き継ぎ、その後の30年にわたり、応用微生物学研究室の研究を支えてくれました。地球温暖化対策の観点からバイオマスエネルギーが脚光を浴び、外部資金獲得の面でも大いに貢献してくれ、先生の先見の明には頭が下がる思いでした。先生ご自身が二度の海外留学を経験されていることもあり、若手の留学にもご理解があり、私の留学の際には背中を押していただきました。その時に得た遺伝子組換え技術は、その後の研究に大いに役立ちました。

平成5年11月に主催された国際学会「三重バイオフィオラム」は、先生の嫌気性細菌由来セルラーゼの研究の集大成として特筆すべきもので、若い学生たちの目を世界に向けさせるインパクトがありました。常に学生のためを思い、学生からも慕われる先生だったと思います。

定年退官後も、釣りや卓球、合唱団と、お忙しくお過ごしでした。私自身、4年前に定年を迎え、記念祝賀会を開催していただきましたが、その折りに、嶋田先生には温かいお言葉をいただきました。発酵学研究室から応用微生物学研究室に名称変更されたのち、微生物工学、再度の応用微生物学を経て、現在は微生物遺伝学研究室と名前が変わっていますが、万能的な微生物の能力を引き出すという、基本的な立場は変わっていません。このことをご報告し、嶋田協先生のご冥福をお祈り申し上げます。

和田浩爾先生を

偲んで

海洋生物資源学科

古丸 明

和田先生はバイオミネラリーション(生体鉱物形成作用)分野の巨人であった。国立真珠研究所という、当時の農林省によって設置された真珠に関する課題解決に特化した研究所に1955年に奉職された。真珠研究所は志摩市賢島の英虞湾を見下ろす高台に昭和32年に設置され、日本における真珠研究のメッカとなった。和田先生の仕事は真珠の形成過程の鉱物学的解析に始まり、真珠品質と微細構造、微量成分との関係の研究、さらには真珠養殖漁業者むけの啓蒙書に至るまで幅広い業績を残された。凶に和田先生の愛された真珠の美しい表面構造を示した。このらせん構造は和田先生によつて、Science誌(1966)などに掲載された。ただ、和田先生は、海外留学とか国際シンポジウムには申請しても、農林省の許可がなかなかおきなくてね、と少し悔しそうに話しておられた。真珠は外貨獲得のエースであったため、国策として真珠養殖技術に関する情報提供が内容によって一部制限されていた時期があったようである。

真珠研究所は時代の流れに沿って、水産庁養殖研究所となり、和田先生は栄養代謝部の部長を長く務められた。私との接点はすでに先生が管理職になられてからであったと思う。先生は学問には厳しい方であった。ある真珠関係のシンポジウムで私がアカヤガイの突然変異体の貝殻の話をした後、先生につかまって「君は自分が何をやって

いるのかわかっていますか」と厳しい指摘をいただいたことを忘れられずにいる。別の研究者に、励ましの言葉をいただいた直後だけに、どちらの評価が?と若い私は当惑した。どこをどうすれば、より良かったのか、聞いておけばよかったと今頃思う。良薬は口に苦しというものの。

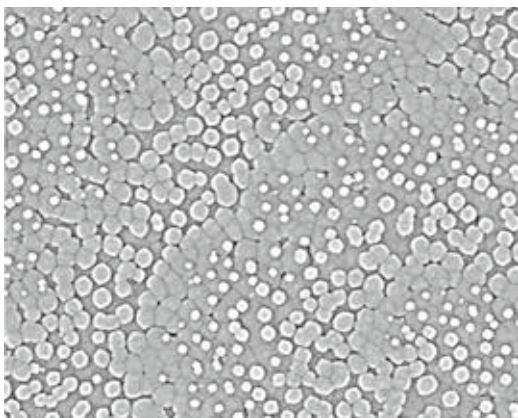
養殖研究所から三重大学生物資源学部に移籍され、先生は教育者として学生指導にあたられた。当時の御所属は無脊椎動物増殖学であった。教え子から聞いた話を紹介しよう。淡水真珠貝の外套膜片異種間移植の透過型電顕観察をその学生がやっていた時の話である。学生が「これは拒絶過程でしようか」と問うと先生は「どれ、かしてみなさい」と言つて学生の代わりに電顕の前に座られ、相当長時間観察され、「なかなか電顕、返して“もらえなかった”そうである。教授として忙しくしておられた合間に、細胞の美しい世界へとしばしば深く入つて行かれたのであろう。

昭和の終わり頃であったか、和田先生はじめ、旧真珠研、旧三重県水産試験場の研究者が養殖現場へのサービスとして、三重県の浦々を回る「移動真珠養殖相談室」というイベントを行つていた。「若い人も勉強になるのでくるように」と言われ、真珠に関わる若い研究者も参加することになった。養殖現場の人が何をどう考えているのか、何を疑問に思つているのか、それに対して真珠研究者がどう答えるのか、を肌で感じる機会になった。令和になつてからも養殖現場でお話をしていると、「あの時和田先生はこう言うつたのう」と古いことを実によく覚えていたので、油断はできない。腕に覚えのある方々なので、研究面で実に頼

りになる。「こうやればもっと結果がきれいになる。貝はこの系統の貝を使う方がええやろ」と。こういう結果が出た、と得意げにデータを見せて、挿核者がびっくりするかと思つたら、そうではなかった。ただ一言「ああ、わしの仮説とは矛盾せんの」と。長年の和田先生達の業界への貢献が、科学する真珠養殖、という形で結晶化していたのであろうか。「巨人の肩に乗る」という言葉が身に沁みた。

鬼籍に入られた先生方に、伺いたいことが時々出てくる。交信を試みたところ、冥界の和田先生からの返事は「盆にしか帰れない。帰つても真珠の組合の会合等多くて忙しい。あなた、よく考えてちゃんとやるときなさい」と。

先生、真珠養殖を取り巻く状況は厳しいのですが、丑三つ時にふらつと現れたりせずに、安らかに良きところでお過ごしください。そちらでは花珠しか出ないそうですね。「品質は前より落ちとる」「質問あったらこつち側に來なさい」、ですか。いえいえ、



走査型電顕による真珠表面画像

私にはまだ資格が全然ない。ゲツ、そちらに行くにも資格審査が。運営も独法化? わつ。合掌

恩師は今

近況報告

鬼頭 孝治

三重大学を定年退職して、1年あまりが過ぎました。皆様方にはコロナ禍が続くなか、それぞれの生活の中でお元氣にお過ごしのことと推察いたします。私も定年まであと1年というときに、突然の新型コロナウイルス流行によつて、大学での教育研究にこれまでに無い対処を求められました。これによつて新たな知見を得ることもできましたが、最後まで慌ただしい定年の年を送ることもなつてしまいました。

このように、定年直前まで慌ただしい日々を過ごしていましたが、周りの勧めとご協力の下に、オンラインで最終講義を実施させて頂いていただきました。多くの卒業生や関係者の方々にご参加いただきましたことを、この場を借りて改めてお礼申し上げます。いろいろ考えるとところはありましたが、結果的に自身の研究生活を振り返るよい機会になったと、お骨折りにいただいた講座の先生方に感謝しています。ただ、オンライン講義であったため、参加された皆様と個別にお話しすることができなかつたことが少

し残念でした。

さて、定年直後はそれまで全くできなかった教員室の片付けにまずは追われました。妻からは自宅にできるだけ持つてこないようにと釘を刺されていますので、学生時代から始まり在職した29年間に溜まった本や研究資料は、電子化したものもありましたが、多くは破棄しました。何か自分の歴史を消したような気にもなりましたが、残しておいても見る機会も少なくなるだろうし、記憶に残せばよいと割り切りました。

現在ですが、生物資源の授業を1科目、非常勤講師として担当させていただいています。1年目はほぼオンラインで授業を行いました。2年目からは原則対面授業となり、久しぶりに学生さんの顔を見ながら行った授業は新鮮でした。オンラインでは全員が最前席であることが大きな利点ですが、顔が見えずコミュニケーションを取りづらなのが欠点でした。対面ではこのことが逆になりますので、PCやタブレットを使いながらなんとか進めています。他にも津市の公民館からの依頼で、これまでの研究や教育の経験を活かして、地域の方々に対象としたドローンの講座やICT、プログラミングの講座を行っています。準備に時間を取られつつも、子供たちや住民の方々とふれあいながら自身が楽しんでいきます。

時間が多く得られる今では、健康維持のため愛犬との散歩の時間を増やしたり、長男の勧めによりコロナ禍の始まる少し前から始めたロードバイクの整備やサイクリングを楽しんだり、大学時代の同級生の誘いにより過去に少し嗜んでいたゴルフを再開したりして、何かとすることに追われています。ただ、退職したら行きたいと思っ

いた海外旅行がなかなか実現できないため、フライトシミュレーターの中で世界中を飛んで来たる日に備えています。とにかくにもやりたいことをするには健康であることがまずは一番ですので、運動を通じて健康を維持できればと思っています。

こんな日常を送っていますが、コロナ禍後の世界を構築しようとする世の中が向かい始めた今年に入って、世界中に衝撃が走りまわった。人類の歴史の中でこれまで絶えたことのない戦争ではありますが、核抑止力がない幻想であり、非核保有国への侵略の道具として使われることを思い知らされました。それぞれの国の事情があるとはいえ、許されるべきことではないはず。一刻も早い終結を望みますが、口だけで何もできない自身の無力さを感じています。改めて平穏な生活が送れることに感謝しています。

最後になりましたが、同窓の皆様のご活躍とご健康を祈念して、近況報告とさせていただきます。

その後1年が 経ちましたが

成岡 市

生物資源学研究科の皆様におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。恥ずかしながら近況報告を申し上げます。

手帳のスケジュールを振り返りますと、令和3年3月末までは6色の蛍光ペンが彩り、同年4月から「空白枠」が続き、モノクローム(白黒)になりました。これが「サデー毎日」というものなのかと、私なが

らに定年退職の實際を体験しています。

空白枠には、ささやかながら、無理のない程度で、心身メンテ(維持、持続、保守、保全...)のメモが鉛筆書きされています。教員住宅から現住所に引っ越ししたので、この機会に歯科医や内科医も新規のかかりつけ医としてお願いしました。良好です。

バイクツーリングのメモも所々に書いています。バイクの免許は私が20代の頃に取得していますが現役時代は「ペーパー」でした。今は「昔取った杵柄」です。周囲から「気をつけなさい」と忠告され、言われるままにしています。ツーリングの愛称を「まったり」と名付け、先頭に生物資源学「研究科学習アドバイザーの齋藤俊彰先生が1000cc超の大型にまたがり、末尾には私が1600ccスクーターの「亀速」を担当しています。

現役時代は仕事以外に歩くことがほとんどありませんでしたので、「空白枠」に未知の土地を風切って巡る日程が追加されるようになりました。近場では腰に鎮痛消炎剤を貼りながら単独行動をしています。懇意のバイク店が「生物資源の先生が結構走ってますよ」と大型排気量のバイクを指さしてくれました。どこかで「ヤエー」(バイク乗りの挨拶)をしているかもしれません。そうは申しませんが、ほぼ1年が過ぎたところで、現役時に積んだ知識や経験を活かすことができれば...、と思うようになりました。ということで遅まきながら就活をしています(原稿執筆時:令和4.4末)。

本文の最後になります。1年前、最終講義はしませんでした。深刻なコロナ禍が原因です。遠隔開講(リモート式)も可能でしたが、私には「人前で、足を振るわせ、

手に汗を握る緊張感あつての最終講義」を願望としていました。その後「集まりだけでもいかがでしょう」と温かなお声がけをいただいています。スケジュールは「空白枠」のままです。

近況報告

石黒 寛

三翠同窓会の皆さまにはお元気にお過ごしのこととお慶び申し上げます。令和2年3月末に定年退職して早や2年以上が過ぎました。平成8年4月に教員として赴任し、微力ながら母校に貢献できたことを大変光榮に思っています。これも皆さまの温かいご支援のお陰と心から感謝申し上げます。

在職中は農業土木学講座に所属し、農業水利施設の設計、材料・施工および維持管理等に関わる教育研究に従事しました。充実した実験施設の下で自由に研究ができたことに感謝しています。また、一緒に実験をした卒業生や留学生、共同研究者、多くの教職員の方々との出会いは、24年間の三重大学での大切な思い出です。

退職後は、三重県建設技術センターや中部地方整備局の委員会等の仕事を継続しています。勤務は、自宅でのウェブ会議を含めて月に2、3回程度ですので、平日にも好きなドライブや旅行、趣味などを楽しんでいます。

新型コロナにより自宅での生活がより増え、体調管理には気を使います。散歩だけでなく継続できる趣味や仕事は必要不可欠と感じています。最近、退職前のやり残した仕事を片付けたいと思いつち、遅まきな

がら実験のデータ整理などを進めています。最後になりますが、皆さまのご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げます。

令和4年5月23日

近況のご報告

梅川 逸人

三翠同窓会会員の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

私は昨年3月末をもって三重大を定年退職いたしました。最後の2年間は三重大の理事・副学長の職にありまして、生物資源学研究所の退職は平成31年3月末になります。三重大には33年間勤務させていただきました。この間、教職員、学生の皆さんには大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。特に学生の皆さんと一緒に研究ができたことは、この上ない幸せでした。最後はコロナ禍の厳しい状況ではありましたが、西尾先生や栗谷先生を始め研究室の方々のご支援により、オンラインと対面を合わせたハイブリッドの形で最終講義をやらせていただきました。今こそハイブリッド授業は普通に行われていますが、当時は結構技術的に難しく、総合情報処理センターの皆さんの技術的なご協力もあり、スムーズに行うことができました。

研究においては、平成2年9月から1年半、米国ミシシッピ大学医学部留学で取り組んだ核小体タンパク質B23の機能解明を帰国後も続けておりましたが、平成12年の学部改組で資源循環学科に所属することがきつかけとなり、食品廃棄物や未利用資源

の有効利用が主な研究テーマになりました。それに伴い、食品企業や自治体との共同研究が多くなりました。共同研究先の担当者の方々の殆どが、旧農学部、旧水産学部を含む三重大生物資源学部出身で、三翠同窓会の方々と一緒に大変興味深い応用研究に取り組ませていただきました。

生物資源学研究所の最後の4年間は研究科長・学部長を拝命し、定員20名増(学部定員260名)を含む学部改組による新設科の生物圏生命化学科と海洋生物資源学学科の設置(3学科から4学科体制)、鯨類研究センターの設置、東紀州サテライトの設置、水産実験所の移転、太陽化学株式会社との連携大学院の設置等に関わりました。いろいろなことが目まぐるしく動く4年間でしたが、大変貴重な経験をさせていただきました。

現役最後の2年間は、情報・国際・環境担当の理事・副学長を仰せつかりました。「情報」は学内メールのクラウド移行、「国際」はウズベキスタンやEUでの中国江蘇大学訪問、「環境」はDCSバッジの学内普及が特に印象に残っております。情報・国際・環境と異なる3つのことに取り組ませていただくことにより、本学のたくさんの教職員や学生の方々と知り合うことができて大変楽しかったです。

定年退職後の令和3年4月より参与・特命副学長(情報・図書館担当)を務めております。組織改革により、情報ライブラリーセンター(図書館)、総合情報処理センター、データサイエンス教育センター(新設)の3つを統合した情報教育・研究機構が令和3年4月に設置され、私はその副機構長に就いております。新設のデータサイエンス

教育センターは、文科省が大学教育を第4次産業革命、Society 5.0、データ駆動型社会などの社会変化に対応するために、各大学にリテラシーレベルの数理・データサイエンスAI教育の実施を求めたことから設置することになりました。三重大の教養教育で全学的に長く開講されてきた情報科学基礎に変わり、昨年度より情報教育科目をデータサイエンスI及び今年度よりデータサイエンスIIという2科目に変更・拡大するとともに、文科省の数理・データサイエンスAI教育プログラムの認定に向けて準備をしているところです。情報ライブラリーセンターについては、世界的な動きでもある学術情報のオープン化、すなわちオープンサイエンスにどのように対応していくかが課題となっています。最後に総合情報処理センターは主な業務であるネットワーク管理と情報セキュリティへの対応が重要ですが、教育・研究のデジタル化、いわゆるデジタルトランスフォーメーション(DX)が喫緊の課題となっております。加えて、事務や医療のDXも進めていかなければなりません。現在、総合情報処理センターは三重大大学全体のDXに対応するため、組織の改革を検討しているところで

あります。

現在私は、住み慣れた生物資源学研究所の建物を離れ、総合情報処理センターに居室をいただいております。お近くまでお越しの際は、ぜひお寄りください。

令和4・5年度 定年退職予定教員

令和4年度

共生環境学専攻

村上 克介

令和5年度

資源循環学専攻

石川 知明

共生環境学専攻

陳山 鵬

大野 研

生物圏生命科学専攻

田口 和典

吉岡 基

酒井 俊典

神原 淳

古丸 明

同窓会 会員名簿



○ 11月上旬発行

○ 予約限定販売

○ 1部 4,000円(送料・税込)

会員名簿の購入等、名簿に関するお問い合わせは、名簿作成作業委託先(株)サトまで

0120-975-816

(受付番号221115)

事務局からの連絡とお願い



一、本年度は「三翠同窓会員名簿」の発刊「令和4年版」を計画しており、11月上旬に発刊予定であります。名簿は最新かつ、正確であるべきで会員各位からの情報は欠かせません。また、個人情報保護法関係を忠実に厳守する必要があります。そのため、会員各位の了承を得て住所・勤務先・電話番号等を掲載したいと考えております。前回の名簿からの変更や記載内容に間違い等がございましたらご案内済みの確認はがきにてご連絡いただけますようお願いいたします。

二、本年度は、2頁掲載「会告」とおり「三翠同窓会総会」を開催いたします。

なお、総会の前に「三翠同窓会三重県支部会総会」が開催されます。当支部会は、三翠同窓会活動の基礎となる中核的な組織で、本会の中の6つの構成同窓会が連携して三翠同窓会を支えています。さらに、資源循環学、共生環境学、生物圏生命科学、生物圏生命化学及び海洋生物資源学の各学科を卒業された方々も三翠同窓会を支えていただきますのでよろしくお願ひします。

編集後記



「三翠」第16号をお届けいたします。

新型コロナウイルスの感染再拡大がございまして、多くの感染者を出しており我校でも少ないながらも感染(濃厚接触)者があり、鬱になりそうな状態でございます。生物資源では、講義は対面式でということになっており、学生の顔を見ての講義は私達教員と学生共にイキイキとしています。

編集作業では、三翠同窓会編集委員の荻田修一(三翠同窓会学内代表理事)、諏訪部圭太(農学会)、王秀崙(農機)、板谷明美(林学会)、坂井勝(志登茂会)、西尾昌洋(化学会)、木村妙子(勢水会)、および三翠同窓会事務局竹谷吉弘が担当しました。

ご多忙中、ご寄稿いただきました皆様に心よりお礼申し上げます。

最後に、皆様のご健勝とご活躍を祈念いたします。

引き続き三重大学生物資源学部ならびに三翠同窓会へのご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

西尾 昌洋(平成6年卒業)

令和4年7月29日

三 重 大 学

三翠同窓会発行

〒514-8507 津市栗真町屋町1577
(三重大学生物資源学部三翠会館内)

☎ 059-231-9677(代)

振替口座 00870-4-16556

E-mail: dosokaijimu@ab.mie-u.ac.jp

個人情報 保護法に ついて

平成17年4月より個人情報の保護に関する法律が施行されました。三翠同窓会においても会員の皆様の個人情報を扱っております関係上、取扱には今まで以上に万全の注意が必要となります。

これを受け三翠同窓会学内役員会では、個人情報保護方針を次のように取扱方法を決めました。

三重大学三翠同窓会個人情報保護要領

本会は、会員の個人情報を適切に取扱う事を重要項目として個人情報保護に関する法律その他関連法令に従い、次のとおり会員の個人情報を細心の注意をもって保護管理をいたします。

①個人情報の収集について

本会は、適法かつ公正な手法で、会員の個人情報の収集を行う。また、収集した個人情報は正確かつ最新の内容に保つように努める。

②個人情報の利用目的

本会は、収集した個人情報を、会則に定める事項の遂行に必要と判断される諸事業(会員名簿の作成・本会及び三翠同窓会からの各種通信文書の送付等)にのみ利用し、それ以外に利用はいたしません。上記の業務遂行上、個人情報の取扱いを第三者に委託する場合があります。この場合は、本会は当該第三者において会員の個人情報を厳正に取扱うよう、役員会で協議し、適正な監督指導を行います。

③個人情報の第三者提供

本会は、会員の個人情報を本人同意なしに三重大学及び会員以外の第三者に提供又は開示はいたしません。ただし、会則に定める事項の遂行に必要と判断される場合は、役員会で審議の上、その業務遂行の委託先へ提供させて頂く場合は契約書を取交わし厳正に監督・指導します。

④保有する個人情報の安全管理

本会は、保有する個人情報を安全に管理するため、秘密保持には万全を尽くします。また、委託先においても適正な監督・厳正な管理を実施いたします。

⑤保有個人情報の開示・訂正・利用停止

本会は、保有している個人情報について、会員ご自身はその開示、追加、訂正、削除、利用停止等を求める権利を有していることを認識し、会員よりこれらの要求があった場合には、関連法令に従い速やかに対応いたします。その際、第三者による情報の操作等を防止するために、公的書類の写しの提出を求め、ご本人からの申し出かどうかを確認することとします。

⑥問い合わせ先

三翠同窓会員名簿に関する問い合わせは次の窓口までご連絡下さい。

三重大学生物資源学部三翠同窓会事務局

〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577番地

TEL/FAX: 059-231-9677

E-mail: dosokaijimu@ab.mie-u.ac.jp